

國學院大學學術情報リポジトリ

東京都八丈町・青ヶ島村八丈島・青ヶ島における「イシバ」の基礎的研究：
國學院大學伝統文化リサーチセンター祭祀考古学調査研究報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002053

國學院大學伝統文化リサーチセンター祭祀考古学調査研究報告

東京都八丈町・青ヶ島村
八丈島・青ヶ島における
「イシバ」の基礎的研究

2012

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

例 言

1. 本書は、平成 23 (2011) 年度に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト（責任担当者：吉田恵二）が実施した、東京都八丈町・青ヶ島村における「イシバ」分布調査に基づく研究報告である。
2. 分布調査には、内川隆志（当センター准教授）、深澤太郎（当センター助教）、石井匠（当センターポスドク研究員）が担当し、加藤渉（学術資料館臨時雇員）が参加した。整理作業には、楠恵美子・山口晃・鈴木孝規（本学大学院文学研究科）、北澤宏明（本学文学部史学科）の協力を得た（順不同）。
3. 本書の執筆者については、それぞれ担当箇所の末尾に記した。
4. 分布図表の作製は深澤太郎・石井匠が担当し、楠恵美子が補佐した。
5. 「イシバ」略測概念図の作製は内川隆志が担当し、鈴木孝規・北澤宏明が補佐し、石井匠が改編した。
6. 「イシバ」の現地写真撮影は調査参加者が分担し、写真図版の作製は加藤渉・石井匠が担当し、深澤太郎が補佐した。
7. 採集遺物の写真撮影・整理作業及び遺物図表の作製は内川隆志が担当し、鈴木孝規・北澤宏明が補佐した。
8. 本調査に当たっては、八丈町教育委員会、青ヶ島村教育委員会をはじめ、浅沼孝則氏（元八丈町中学校教諭）、金川育男氏（元八丈町教育委員会教育長）、菊池孝光氏（優婆夷宝明神社宮司）、菊地義郎氏、佐々木宏氏（青ヶ島村村長）、樋口秀司氏（元青ヶ島中学校校長）、佐藤克彦氏（青ヶ島村教育委員会教育長）、荒井良一氏（青ヶ島整備工場）、奥山信夫氏（青ヶ島村神主）、奥山タカ子氏をはじめとする現地の方々より多大な御厚意を賜った。また、調査に先立って、小川直之教授（本学文学部）より石信仰研究に関する御指導を賜った。ここに記して、深甚なる謝意を表する次第である。
9. 本書は、吉田恵二・内川隆志の監修のもと、石井匠・深澤太郎が編集した。

目 次

例 言

第1章 調査研究に至る経緯	(吉田恵二・内川隆志・深澤太郎・石井匠)	129
第2章 地理的・歴史的環境	(石井 匠)	130
第3章 分布調査の経過	(加藤 渉)	132
第4章 調査研究の成果	(石井 匠)	133
序 節 「イシバ」の定義と調査研究の射程	(石井 匠)	133
第1節 八丈島のイシバ	(石井 匠)	139
第2節 青ヶ島のイシバ	(石井 匠)	155
第5章 考察	(石井匠・深澤太郎)	162

挿図目次

図1 八丈島・青ヶ島の立地	(深澤太郎)	131
図2 八丈島のイシバ分布地点	(深澤太郎)	140
図3 八丈島大賀郷地区イシバNo. 17～20詳細地点	(石井 匠)	144
図4 優婆夷宝明神社近隣イシバNo. 17～20平面図と自然立石	(石井 匠)	145
図5 八丈島樫立地区三島神社境内略測概念図	(内川隆志)	147
図6 八丈島樫立地区イシバNo. 24～28詳細地点	(石井 匠)	148
図7 八幡山山頂イシバ略測概念図 (八幡宮・稻荷神社)	(内川隆志)	150
図8 八丈島末吉地区イシバNo. 42～46詳細地点	(石井 匠)	154
図9 青ヶ島のイシバ分布地点	(深澤太郎)	155
図10 青ヶ島休戸郷地区大里神社境内イシバ略測概念図	(内川隆志)	157
図11 青ヶ島西郷地区金毘羅神社境内イシバ略測概念図	(内川隆志)	159
図12 八丈島・青ヶ島のイシバ表面採集遺物	(内川隆志)	167

表 目 次

表1 八丈島・青ヶ島のイシバ表面採集遺物観察表	(内川隆志)	168
表2 八丈島・青ヶ島のイシバ分布地一覧	(石井 匠)	169

第1章 調査研究に至る経緯

伊豆半島沖、相模灘の南に連なる伊豆諸島には、島々独自の文化や日本列島各地で失われつつある古い習俗が保存されている。これから本書で取り扱おうとする八丈島・青ヶ島の「イシバ」を主体とする石信仰も、維新前後の神仏分離や、明治初年に行われた神社合祀、戦後の高度経済成長などの影響は免れ得なかったであろうが、少なくとも中世まで遡る民俗宗教の面影を今日に伝える貴重な文化遺産であることは疑いない。このような石信仰の実態を明らかにするためには、その構造や存続時期を把握するための考古学的調査は勿論、現在も受け継がれている信仰習俗を理解するための領域を横断する人類学的研究を試みる必要がある（桜井 1958）。

南伊豆諸島の信仰を対象とする戦後の本格的な調査研究は、1938年・1949年のフィールド調査を基にして纏められた大間知篤三の『八丈島』（1951・1960）を嚆矢とし、その後、東京都教育委員会が八丈島・八丈小島・青ヶ島をフィールドに、地質・植物・風景・建築・文書・美術・信仰・芸能・人文地理・民俗などの諸分野を対象とする「八丈青ヶ島文化財総合調査」を昭和33（1958）年度に実施している。その成果は数百頁に及ぶ大部の報告書「第3分冊」「第4分冊」として刊行されている（東京都教育委員会編 1960a, b）。また、大間知や東京都総合文化財調査に参加した岡正雄、蒲生正男、村武精一、坪井（郷田）洋文、桜井徳太郎、金山正好らが精力的に伊豆諸島の調査研究を継続し、成果を公表してきたことは夙に知られている通りである。

一方、伊豆諸島における石信仰に係る考古学的調査研究は、本学考古学研究室及び学術資料館考古学部門（旧考古学資料館）が一貫して推進してきた研究テーマの一つでもある。本学考古学研究室は、昭和56（1981）年に東京都立三宅高等学校の田中俊造事務長（当時）より三宅島における積石塚についての学術調査要請を受け、同島に所在する積石塚の調査・研究を継続的に進めることとし、それらの年代・構造・性格の追求を目的とする発掘調査を、考古学実習の一環として執り行ってきた。初年度は、坪田地区中郷の積石塚群（吉田編 1993）、昭和57（1982）年から平成20（2008）年にかけては、伊豆地区に所在する大型積石塚群である物見処遺跡の調査を実施し、同時に島内の積石遺構について悉皆的な分布調査を行った（吉田編 1994～2000）。また、永峯光一（当時本学文学部教授・同考古学資料館館長）を研究代表とする『文部省科学研究費総合A』『海洋信仰の考古学的研究—伊豆諸島における鏡信仰を中心として』[平成3（1991）年～平成4（1992）年度]では、八丈小島鳥打遺跡・宇津木遺跡（青木・内川・粕谷編 1994）、利島堂ノ山神社遺跡の発掘調査（青木豊・内川隆志編 1994a）を行い、その後も國學院大學考古学資料館及び本学海洋信仰研究会等を主体として、御蔵島神ノ尾遺跡（青木豊・内川隆志編 1994b）や利島八幡神社境内祭祀遺跡（青木豊・内川隆志・金成南海子編 1999）、利島阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡（青木豊・内川隆志・須藤友章編 2005）等の調査研究を継続してきた経緯がある。

ところで、現在、当センターでは、平成19（2007）年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業の一環として、「祭祀遺跡に見るモノと心」グループが既往の調査成果を活用しながら、「神道」の成立・展開や、日本列島の信仰史に関する考古学的研究を推進している。その中で、伊豆諸島における石信仰の調査研究をテーマの一つとして定め、これまでに以下のような調査研究を行って来た。平成20年度は、本学で発掘調査を行った八丈小島の島打・宇津木両地区の「イシバ」実態調査を実施した（内川 2008）。平成21（2009）年度は、本学が長く調査に携わってきた三宅島の積石塚を調査研究対象の一つに定め、積石塚・和鏡出土伝世地の位置情報、積石の構築材となる海岸転石の散布状況、在地信仰の基盤となった社寺等の実態調査を実施した（吉田・内川・深澤・石井編 2010）。続く平成22（2010）年度には、利島・新島・式根島における石信仰に係る社寺や積石塚等の実態調査を行い（未報告）、平成23（2011）年度は八丈島・青ヶ島の「イシバ」を調査対象とし、島内の主要な「イシバ」や社寺の位置情報の測定及び簡易測量を実施した。本稿では、八丈島・青ヶ島を対象とする事前の文献調査で知り得た聖地の位置情報の内、現地比定し得た「イシバ」の分布調査成果について報告するが、当調査で得られた基礎的な情報は、従来の調査成果と併せて今後の石信仰研究に生かされることになる。

（吉田・内川・深澤・石井）

第2章 地理的・歴史的環境

伊豆諸島は富士火山帯に属する火山島群であり、一般的に、大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島の北部伊豆諸島と、八丈島・八丈小島・青ヶ島・ペヨネーズ岩礁・スミス島・鳥島・嬬婦岩礁・マーカス島（南鳥島）の南部伊豆諸島とに分けられる。さらに南方、東京都中心部から南南東に約1000kmの位置には、八丈島民が移住している30余島から成る小笠原諸島がある。小笠原諸島は、沖縄の南大東島と同様に、人的移動・交流という面で南伊豆諸島と密接に関連している地域であり、今後の石信仰研究においても欠くことのできない調査対象地域である。

八丈島の概要

八丈島は東京の中心部からほぼ真南へ約290kmに位置する。面積は68.33km²で、「坂下」と呼ばれる三根・大賀郷地区と「坂上」と呼ばれる檜立・中之郷・末吉の5地区に分けられる。富士火山帯に属し、北西部の西山（別称・八丈富士、標高854.3m）と南東部の東山（別称・三原山、最高点700.9m）、新旧両山の寄生火山群からなる火山島である。岩質は主に安山岩、玄武岩、凝灰岩から成る。東山は多重式死火山であり、湧水地も豊富で加茂（鴨）川・南沢・積田川・唐滝川・安川・社川・瀬戸川・名古川等を抱える。「イシバ」のある八幡山や神止山は東山の寄生火山と考えられている。西山は複式休火山であり、長享元（1487）年、永正15（1518）年、大永2（1522）・3（1523）年、慶長10（1605）年、宝永4（1707）年の噴火記録が残る。現在、「イシバ」が築かれている大賀郷の護神山や弁天山は、西山の寄生火山とされる。八丈島の北側（時に南側）には黒潮（日本海流）が横たわり、北部伊豆諸島間との航海の難所となってきた（東京都八丈島八丈町教育委員会編 2000）。

八丈島に人が住み着いたのは、調査の及んでいる範囲では縄文時代早期に遡る。弥生時代以降、平安時代にかけても遺跡が点在するが、平安時代に大島へ流刑となった源為朝が渡来したと伝わる「為朝伝説」は史実としては確認できない。鎌倉時代には相模国に属し、鎌倉幕府の直轄地となる。室町時代には関東管領上杉氏の支配下に置かれ、戦国時代になると後北条氏の支配下に入り、江戸時代の寛文9（1669）年以降、伊豆国代官所の所管となる。なお、慶長11（1606）年に宇喜多秀家主従13名が流罪人として送り込まれて以後二百数十年間、流刑の地となる。明治になると所属を二転三転とし、明治11（1878）年東京府に落ち着き、明治33（1900）年東京府八丈庁が設置される。第2次大戦中の昭和19（1944）年夏、軍部は八丈島を国防の第一線として防備強化を図り、翌春には陸軍約2万、海軍約7千の大部隊となっていた。島に残った人々は玉砕を覚悟で踏みとどまり、終戦を迎える。戦後、政府の町村合併促進の基本計画に基づき、昭和29（1954）年、八丈島・小島7ヶ村のうち5ヶ村が合併し八丈村となった。翌年4月1日残りの2ヶ村がこれに加わり、八丈町が誕生する（同掲書）。

青ヶ島の概要

青ヶ島は東京の南約3587km、八丈島から約68kmに位置し、面積は5.23km²、行政区分上は無番地とされるが、集落のある島北半の休戸郷・西郷地区と、主に畑地として利用される島南半の池之沢地区の3地区に分けられる。島は二重式火山で、大里神社や東台所神社が山頂に鎮座する外輪山（最高峰標高423.1m）と、丸山と呼ばれる内輪山から成り、主に凝灰岩、玄武岩、安山岩からなる火山島である。承応元（1652）年、寛文10（1670）年、安永9（1780）年、天明元（1781）・2（1782）・3（1783）年に噴火が記録されているが、天明5（1785）年の大噴火によって、島全土が焦土と化し、島民220名が死亡、203名が八丈島へ逃れたという（青ヶ島教育委員会 1984）。

現在までに確認されている遺跡はなく、室町時代や戦国時代は八丈島と同じ状況にあったようであるが、天明の大噴火以後、無人島の期間が続く。文化14（1817）年に青ヶ島中興の祖、佐々木次郎太夫が名主となり、努力の末に天保5（1834）年、村民が還住を果たす。八丈島同様、明治11（1878）年東京府に落ち着き、明治33（1900）年東京府八丈庁が設置されると共に、出張所が設けられる。昭和29（1954）年、青ヶ島は村制を維持し、青ヶ島村となる。

（石井）

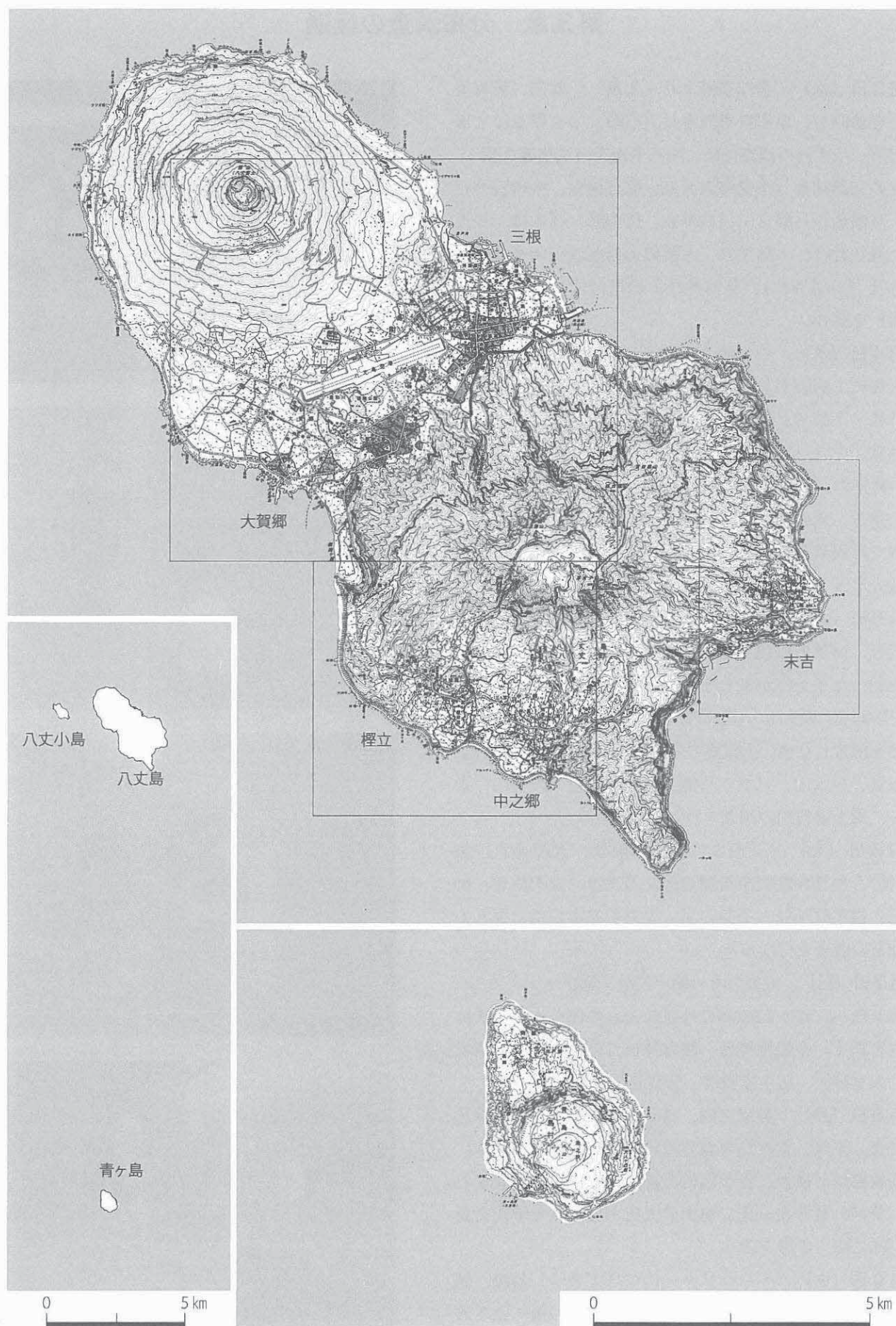


図1 八丈島・青ヶ島の立地

第3章 分布調査の経過

8月3日(水) 羽田空港より八丈島へ。着後、教育委員会を訪問し、金川育男教育長(当時)のご厚意にて車を借用。八丈島の調査では、浅沼孝則氏のご指導を頂く。檜立の三島神社、不受布施派墓、服部屋敷、中蔭院の石室、八幡山の八幡宮・稲荷神社、庚申塔、道六神、弁天様、諏訪神社、人捨て穴、大賀郷の優婆夷宝明神社、三島神社(戸隠神社)、稲荷神社、松尾神社、磯神社(出雲様)を踏査。

8月4日(木) 中之郷の八幡宮・稲荷神社、道六神、弁天様にて簡易測量調査を行う。また、中之郷の金刀比羅神社・不動堂、長楽寺、三島神社、大御堂、名号墓、釈迦堂、中オシ不動、末吉の三島神社、薬師堂、地藏、長戸路屋敷、水神、石場之神、ミナトノ神、オオタンチョウを踏査。末吉の八幡様、金山様、金山様・諏訪様・出雲様では簡易測量調査を実施。加えて夕刻には、末吉の尾越の水汲み場、稲荷大明神、丹娜婆の墓を調査。

8月5日(金) 中之郷の個人邸内に所在するイシバを調査し、屋敷内の観音様も拝観。また、隣家の屋敷内に最近祀ったイシバがあるとの知らせを受け、庭内のイシバを訪ねる。更に、中之郷の大御堂、水神様、為朝神社、護神を踏査した後、大賀郷の為朝神社、釈迦堂、天満宮、薬師堂、弁天山、三根の八幡宮、尾端観音、護神山、崇福寺、郷土資料館の調査を行った。

8月6日(土) 三根にて、オボ地藏、天照皇大神宮(護神)、牛捕仲間安全祈願の碑、善光寺、忠次郎様、供養橋、根田原神社、不動の滝、宇喜多秀家の墓、檜立の大神宮の調査を行なった。

8月7日(日) 大波のため船が欠航、急遽ヘリコプターで青ヶ島へ。青ヶ島西郷では村長夫人の佐々木由美氏に案内を頂く。金毘羅神社、渡海神社、東台所神社、清受寺、大里神社、名主屋敷跡、三宝港を調査。

8月8日(月) 神子之浦、富士山神社他、池之沢地区を踏査。午後、青ヶ島村教育委員会を訪問させて頂き、佐藤教育長に挨拶。青ヶ島村図書館にて、資料調査を行う。夕刻、荒井良一氏、奥山信夫氏・奥山タカ子氏に島の信仰に関する話を伺う。

8月9日(火) ヘリコプターにて八丈島へ。着後、御富士権現を経て八丈富士の踏査を行う。その後、乙千代ヶ浜を訪ね、全ての調査を終了。温泉にて汗を流し東京へ。羽田空港にて現地解散。

(加藤)



第4章 調査研究の成果

序節 「イシバ」の定義と調査研究の射程

(1) 「イシバ」言説をめぐる一考察

『八丈實記』にみる「イシバ」

今回の調査研究対象である「イシバ」（石場）は、八丈島・青ヶ島において神々が祀られる聖域に対する呼称のひとつである。しかし、祀られる神を指す「イシバサマ」や他の神名が神域を指すこともあり、呼び名は様ではない。「イシバ」の語源は不明であるが、本稿における「イシバ」の定義付けを行うために、ここで幕末前後に記された近藤富蔵の『八丈實記』における「石場」に関する記述を、いくつか確認しておきたい（巻数は引用元が原本とする「都政史料館原本」の巻数）。

第六巻「五村惣評」「三峯村」（近藤 1964「第三編」）

神社ヲカミヤ、祠ヲ石場、宝殿ヲホウデ、穴ヲトマ、助語ノヲガト云フコト多シ。

第六巻「五村惣評」「大賀郷」（近藤 1964「第三編」；傍線引用者）

大里ノ社地ニ天道宮アリ。伝云、日読尊、月読尊ナリト又三嶋神社ト、又十王堂、伝云冥土ノ十王ニハアラス、竜王ノ呼誤ナリ、祭神ハ善女竜王、八大竜王、応誉妙竜ノ十座ト。イツレモ社ハナシ、石場也。石場トハ此嶋ノナラハシ、神祇ヲアガメ奉ル処ハ清浄ノ地ニ丸石ヲ積み、コレヲ名ツケテホウデト云、宝殿ナルベシ、廻リニ樹木ヲ植テ、前ニハ白幣ヲサ、グ、是嶋ノ故実也。

第十八巻「居宅」（近藤 1964「第五編」；大賀郷の居宅に関する記述）

鎮守ハ邸隅ニアリ。タ、丸石ヲ積テ花表ヲタツ、コレヲ石場ト云ウ。

第二十五巻「神社古跡明細記」「一、富士山 富士神社」（近藤 1970「第一編」）

社 石室（銘云、弘化三丙午年九月廿三日菊池勘次郎又社地ニ石ヲ建テ嶋方言ニ（所謂）^{ホウデ}宝殿ト云ウ高サ四尺余幅二尺余ニ而文政八乙酉年九月大賀郷若者四十二人連名発起（願）主菊池勘次郎ト刻セリ）…中略…即チ高サ五尺、幅二尺ノ文政八ト書シタルホウデ石是也、…中略…石宮ヲ建立ス、弘化三ト銘スル者コレ也

第二十五巻「神社明細記」「一、同所宮ノ平 アラブ社」（近藤 1970「第一編」；三根の神社に関する記述）

社ナシ石場也 石場トハ樹而不廟嶋ノ古風（俗）信スル神アレバ地ヲエラミ浜ノ丸石ヲ建 マエニ鳥居ヲ立テ白幣ヲサ、ゲ何神ノ石場ト称フ（ル古風也）

重要部分を要約すると、現在の三根地区では「神社＝カミヤ（神屋）」「祠＝石場」「宝殿＝ホウデ」と呼び分けられていた。大賀郷地区では、優婆夷宝明神社の末社で「社」のない聖域は「石場」と呼ばれ、その「石場」に丸石を積んだものを「ホウデ」と呼び、屋敷の隅にある丸石を積んだ「鎮守」（屋敷神）は「石場」と呼んでいた。西山山頂に座す「富士神社」にある弘化3年の刻年を有する「石宮」は「石室」とされるが、それらを奉納したあるいは立（建）てた場を「ホウデ」と呼び、その立てられた文政8年の刻年を有する石を「ホウデ石」と呼んでいた。さらに、特別な場所に丸石を立て、その前に鳥居と白幣を捧げ、神を祀ったものを「石場」と称えていたという。

つまり、これら『八丈實記』の記述から分かることは、当時の人々にとっては、神を祀る場所＝「石場」＝「ホウデ」＝立石・積石・石宮・石室・石祠ということであり、社殿のある神社＝「カミヤ」（神屋）とは区別さ

れたということである。

このことは、即ち、「イシバ」に置かれる「石」は自然石であっても人工石であっても大差はなく、それらの「石」と「神を祀る場所」は相即不離であることを意味し、くわえて、「石」本体が家形の石宮・石祠であっても、神の社（家）としての神社社殿とは区別されるということである。

民俗学における「イシバ」

これらのことを踏まえた上で、次に、民俗学において当該地域の「イシバ」はどのように捉えられてきたのかということを見ていくことにしたい。大間知篤三は1936・49年のフィールド調査の成果をまとめた『八丈島』の中で、当時「イシバサマ」と呼ばれていた八丈島の屋敷神について、次のように記している。

屋敷神は屋敷の東北隅や西北隅に祀られている。丸石やそげ石を置いたり、石垣の一部を凹まして祀つたりした極く簡素な形式のものが多く、石の小祠を置いたものもある。坂上では明治年代に村の氏神へ合祀したので、今は数少なく、坂下の二村にかへつて多く見られる。坂上の人々は、坂下には巫女が多いので新しく祀る者も多いのだと評する。坂下では屋敷神を普通にイシバサマと呼び、またテイシバサマともいふが、これらの語は慳立でも聞いた。イシバという語は、本来祠の設けがなく、単に自然石を置いた靈所の形態を表はすものであつたのではないかと思はれる。したがつて屋敷神を表はす語ではなくて、靈所に關した名稱なのであらうが、今は石祠のある屋敷神をもみなイシバサマと呼んでゐる。

（大間知 1960「(五) 屋敷神」）

このように大間知は自然石が置かれた「靈所」が「イシバ」の古態であると想定し、続けて他の箇所において『八丈實記』を参照しつつも、自身のフィールド調査の知見から「イシバ」を次のように定義する。

神を祀る地に社祠を設けず、自然石を一つ置いたり、積み上げたりしたものが少なくない。それが大木の根元に在ることが多く、鬱蒼たる森林に包まれてゐるのもあり、また樹木とは無關係に立つてゐる場合もある。かかる形式の靈地をイシバと呼ぶ。

（大間知 1960「靈地・靈威」；傍線引用者）

この後に「イシバ」に置かれる石を「ホーデ」と称するとの記述もあり、「イシバ」を巡る呼称が幕末前後の時期とさほど変わっていないことが確認される。しかし、この定義で問題となるのは、大間知がわざわざ冒頭に「神を祀る地に社祠を設けず」と付し、あくまでも「イシバ」は「自然石」が単独に、あるいは樹木の根元や鬱蒼とした森林にあることを重要視し、強調している点である。この観点が後に、大間知との共著『八丈島』中の坪井洋文の「イシバ」の説明にある発展段階説として結実することになる（大間知・金山・坪井 1960「あとがき」にあるように大間知の加除修正を受けている可能性が高い）。

島ではいたるところに神を祀っている。自然石を一つ置いたり、幾つかを積み上げたもの、御幣を立てただけのもの、大木の根もとに御幣を立てたもの、小さな祠を設けたもの、何かの像を刻みこんだもの、樹木の茂みなどと変化に富んでいる。人々はこのようにして神を祀った聖なる場所を一律にイシバと呼んでいる。字は石場と書くのかもしれないが、テイシバという人もある。共同で祀るのもあれば個人のもあるわけで、何かの機会に神を祀る必要が生ずると、適当な土地に浜石を建てて何神様といって信仰するのだから、忘れ去られる神もあれば新しく祀りはじめる神もある。一定の社殿や広い神域を必要としないのだから、簡単に人々の信仰心を満足させることができるわけだ。（中略；「ホーデ」の説明部分）

イシバサマの特徴はいくつかあるが、その一つに石を積むだけではなくて、そこに石でつくった小さな祠に神名を刻み、奉納者の名前を入れて供えるものが多い。これは大きな神社にも見られるところであるが、何かを祈願する具体的な表現として石の小祠をあげるということは、社を建立する意味を持つものである。

同じような意味で小石の前に小さな鳥居を供えているのも目につく。(中略) 浜石を置いて神霊が宿ると考えた形から、住いとしての祠や鳥居を設ける形は、神社社殿の成立を考えるうえによい資料となる。

(大間知・金山・坪井 1966「民間信仰 イシバとホーデ」；傍線引用者)

さて、問題となるのは、大間知・坪井が、神の依代・招代としての自然石が「イシバ」の古態であり、それが社の形に似た石祠に変化するということは、神の「住い」としての神社社殿の成立と密接な関わりがあるとの認識に立っている点である。おそらくは、「イシバ」の「自然石→石祠+鳥居」という移り変わり、神籬のような「依代→社殿+鳥居」という変遷とを重ねて見ているのであろうが、このような発展段階説は八丈島・青ヶ島の「イシバ」の石には当てはまらないし、社殿成立過程とは別問題である。

仮に、両者の変遷過程を比較するとするならば、神社社殿の成立過程と人工石祠の成立・伝播過程などに関する細かな歴史学的検証による比較検証が必要となるが、おそらく徒労に終わるだろう。聖地に家形の石祠が祀られ、鳥居が立てられるからといって、それがすぐさま社の建立を意味することにはならず、単純に神社社殿の成立過程と結びつけることはできない。

「イシバ」の本質

確かに、近世に作製された中空の石祠の中に神体を納めるものもあり、それがイシバの中心に建てられている事例も多い。この場合は、社の建立を意味するのかもしれない。しかし、八丈島・青ヶ島の「イシバ」を占めるのは、大間知や坪井が指摘するように、中心に置かれる社としての石祠に寄生するかのように祀られた自然石や、自然石で組まれた石室（内部に自然立石があるものが多い）、神名が彫られた中実の小石祠が、今もなお圧倒的に多いのである。

こうした状況は、大間知や坪井が考えるように「自然石→石祠」という「イシバ」に祀られる石自体の歴史の変遷を示していることは間違いないが、石祠がそののち神社社殿に発展を遂げるとは考えにくい。

「イシバ」に個人持ちのカミを祀るために、既成の聖地に安価な(?) 石祠を祀る、と捉えたとする。これは合理的説明ではあるが、近現代的な価値尺度に拠る商業主義的解釈である。あるいは、家形の石祠を素朴な「イシバ」に祀り、鳥居を立てる。これは「神を祀る場」＝「鳥居と社殿が建てられた神社」という現代の常識的見地からすると、社を建立する原初的形態に相違ないと捉えられてしまうのだが、『八丈實記』にもあるように、そして、今現在の「イシバ」においても、鳥居や御幣が捧げられるのは、人工の石祠だけでなく自然石も対象とされており、両者は同等の扱いを受け続けている。

「イシバ」の本質を捉えようとするならば、近現代的価値尺度は一旦捨て去ったほうが良いだろう。そもそも、家形石祠と神社社殿の造形デザインとが、どのような因果関係にあるのかは未解明であるが、少なくとも近代以降の所産であることが確実な中実の家形石祠は、神社社殿のイミテーションであることは明らかである。

とはいえ、近世の刻年が入った大ぶりの中空の石祠は、神社社殿と相通じるものがあるかもしれない。しかし、時代や地域差によって石祠の製作者や受容者・使用者の意識は微妙に異なるだろうが、八丈島・青ヶ島に残されている石祠を作製した石工たちが、どのようなイメージを石祠に対して抱いていたのか（木造神社社殿と同義の石の社を作るとの認識があったのか）、あるいは、それを「イシバ」に置き始めた人々がどのようなイメージを持っていたのか（神社社殿と同様のものとして受容していたのか）は定かではない。とはいえ、少なくとも現状の取り扱い方を見る限り、神名の刻銘入り中実小石祠は、形態差はあっても、浜から「イシバ」に運ばれる神体としての丸石・尖石・板石と本質的に変わらない。

あるいは、内部に金銅製の御神体が納められる、社殿的意味合いが強いように思われる中空の石祠であっても、「イシバ」に祀り置かれるものが、台風に対する耐性という機能性を考慮に入れたとしても、木造の祠ではなく「石」であるということに重要な意味があるように思えてならない。

そもそも、幕末前後の時期とはいえ『八丈實記』にあるように、八丈島の人々が「カミヤ」（神屋）と「イシバ」（石場）を区別していたことからして、石祠は形態的類似性に反して、本質的に木造の神社社殿とは遠い地平にあ

り、むしろ自然石に近いところにあると言える。「イシバ」の定義の項で後述するが、依代・招代の要素は否定できないとしても、おそらく、自然石も石祠も、神そのものとして認識されてきたと考えるほうが自然であろう。

我々研究者は、場合によっては当事者たちも、自然物と人工物とに優劣をつけて区別してしまいがちである。その「区別」によって新しい観念や概念が生まれてくるのだから無碍に否定はできないし、する必要もない。とはいえ、とりわけ考古学を筆頭とする物質文化研究においては、両者を分類することで別種の物として扱ってしまい、両者はまるで無関係のものとされるか、あるいは自然物は人工物をつくり出すための素材に過ぎない下位の物、という現代の消費資本主義社会の価値尺度に拠った認識が当たり前の事実・前提とされてしまうのは大きな問題である（この問題については別稿で詳述している；石井 2011・2012）。

少なくとも「イシバ」の場合、聖地に祀り置くモノは、どのような形であっても「石」であることが重要なのである。くり返すが、人工の石・自然の石に優劣はなく、両者は等価である。溶岩であろうとコンクリートであろうと、石であることに意味がある。これを見誤ってしまうと、「イシバ」の本質に接近していくことは叶わないのではないだろうか。

変転する「イシバ」の呼び名

ところで、「イシバ」の別称として挙げられるものに、半世紀前に東京都による八丈島末吉地区の民俗調査で報告された「カミヤマ」がある。「カミヤマ」は「神山」であろうが、屋敷内や屋敷に近接するこんもりとした杜を指し、シュロの大木の根元に自然石が置かれていたというのが、その石の多くは氏神の境内（三島神社）に集められ、「カミヤマ」も少なくなったとの報告がある（郷田（坪井）1960）。

「カミヤマ」は屋敷神の一形態として捉えられるが、同じ時期の建築班の報告では、異称が報告されている。屋敷神は「一家を護る守護神として、古来から屋敷内の東北隅や西北隅のオリ（引用者註：石垣）の上に祀られる。三根・大賀郷・榎立では、通称イシバサマと呼ばれるが、中之郷ではチョーサマ・末吉ではチョーヤと称され、中之郷・末吉地区では明治末年から大正初年にかけて、三島神社に合祀されたという（石原・中村・福地・伊藤1960「b. 屋敷神の習慣」）。

建築班の報告する屋敷神としての「イシバサマ」は、近藤富蔵（1966）や大間知（1951・1960）が既に報告しているが、民俗班の「カミヤマ」の石と、建築班の「イシバサマ＝チョーヤ」が同一のものか定かではないとしても、両者の報告の整合性をとるとすると、末吉地区では「カミヤマ」という杜に「チョーヤ」と呼ばれる「イシバサマ」が祀られていたということになる。

じっさい、地区は異なるものの、今回の分布調査で確認できた中之郷の屋敷内の「イシバ」（八丈島 No. 34）は、こんもりとした小高い杜の中にある自然石で構築されたもので、御亭主は「イシバサマ」と呼んでいた。

一方、1958年度の民俗班調査で「カミヤマ」と呼ばれていた末吉地区の場所は、世代が変わると「イシバ」と呼ばれるようになる。東京都による同地区の約20年後の民俗調査報告では「カミヤマ」の記述はなく、同様の場所が「イシバ」と呼ばれ、各戸にあった屋敷神としての小石祠や自然石（角石・丸石）が、「イシバサマ」と呼ばれるものとして報告されている（千葉 1981）。

また、「イシバ」に置かれる石は「垢離をとった際に海辺から持ってきて供えた石」であり、「ホーデ」と呼ばれるという（千葉1981）。これは先に引用した『八丈實記』や大間知（1951・1960）、坪井（大間知・金山・坪井1966）の記述とも一致しているが、「イシバ」の呼び名は地区や時代の違いによって一定ではないものの、今も昔も聖地と石が密接な関係にあることは確かなようである。

ちなみに、大間知（1951・1960）や坪井（大間知・金山・坪井 1966）も報告している通り、屋敷神として祀られる「イシバサマ」の場合、「テイシバサマ」（「テ」は「手」「庭」が当てられることが多い）と呼ばれ、石祠に神名として刻まれる場合も多い。

また、中之郷・末吉地区では、「イシバサマ」の夥しい自然石や石祠が三島神社に合祀されているのは事実であるが、三島神社は大賀郷・榎立地区にも鎮座しており、そこにも同様に多様な神名が刻まれた小石祠や多数の自然石（尖石・丸石等）が祀られている。このような状況は神社に限らず、八丈島・青ヶ島のほとんどの「イシバ」

で見られる光景である。

「イシバ」の神々

ところで、「イシバ」に祀られるカミは多様で、「イシバサマ」や「テイシバサマ」だけではない。例えば、1958年度の民俗調査では、八丈島各所に祀られる石祠に刻まれる神名が、以下のように列挙されている。「木玉新玉様・木玉天宮・金山様（鍛冶の神）・御富士権現様・庭石場様（屋敷神）・庭内神社・水天宮・金刀比羅様・出雲大社様・不動様・春日神社・豊川様・三島様・薬師様・八幡様・猿多彦命・万御神様・木ノ花咲や姫・水神さま・沖之明神・港明神・途中之明神・新宮様・月岡様・森木大神など」（田村・金山 1960）。

こうした「イシバ」に祀られる多様な神々のなかで、八丈島・青ヶ島の民間信仰研究で特に取り上げられるのが「トーゲサマ」「キダマサマ」「カナヤマサマ」である（大間知 1951・1960、大間知・金山・坪井 1966、蒲生・坪井・村武 1975、菅田 1984）。

「トーゲサマ」は、大正期以前、道の難所や辻に祀られた自然石であり、猿田彦だという人もいたらしく、道祖神との近似性も認められそうだが、道行く人の守り神であると言われながらも気性が荒く、前を通るときには乗っている牛から降りなければ突き落とされるとも言われたらしい（大間知・金山・坪井 1966、菅田 1984）。現在も「トーゲサマ」と思しき「イシバ」は八丈島・青ヶ島にも存在している。

「トーゲサマ」などの「イシバ」周囲に茂る木を「モリギ」と言い、その中でも木の霊魂が宿っているものを「キダマギ」と言うようで、その霊魂を「キダマサマ」と呼ぶようである。現在も八丈・青ヶ島の小石祠の刻銘に多くみられる神名の一つである。「カナヤマサマ」は鍛冶屋の守護神と言われているが、数多の神々のなかで最も恐れられているカミであり、「イシバ」に祀られる石祠の刻銘にも多く認められる（大間知・金山・坪井 1966、菅田 1984）。また、青ヶ島では「カナヤマサマ」は鍛冶神であるが、「猿田彦で火の神」と言われてもいた（坪井 1975b）。

「イシバ」の定義

さて、「イシバ」は当て字の「石場」のとおり、特別な石がある場所、あるいは石で構築された祭場・聖域・神域を指すことが一般的ようであるが、「神聖なる場所」と祀り置かれる「石」に対する呼び名は時代によって異同があり、祀られる神も多様である、ということをごここまで確認してきた。

いずれにせよ、八丈島・青ヶ島においては、聖なる場所と石は相即不離の関係にあるということが重要である。とある人が、とある場所から、とある石を選んで運び、その人や家族、あるいはその人が所属する社会集団が、特別な場所と認識している場所に石を置く。置かれた石は、その時点から聖なる場所に在る「聖なるもの」としての聖性を帯びはじめ、聖地と一体化する。

そうすると、不可視のカミが来臨するないしは居る場所に置かれた石は、神体もしくはカミそのものとなる。あるいは、石自体が最初からカミとして認識されているのかもしれない。その場合、聖なる石が置かれることによって、その場所は神聖化されることになる。鶏が先か、卵が先か、聖地と石の関係ではどちらもあり得だろう。とはいえ、民俗学的観察が困難な時代をも扱う考古学的観察者の視点からは、卵の石がなければ母胎の聖地の判別は不可能に近い。

今後、先史時代から現代に至る「イシバ」の通史的比較研究を想定に入れているので、さしあたって、本稿で用いる「イシバ」には汎用性を持たせ、卵の「石」（石祠等を含む）をメルクマールとして「石で構築された祭儀が行われる神聖なる場所」という意味で用いることにする。

現在、八丈島・青ヶ島でイシバが確認できる場所は、屋敷内や垣根、川縁、木の根元、路傍、辻、字境、神社仏閣境内、山頂、岬など、人間のあらゆる生活空間に見られる。また、イシバに祀られるカミも多種多様で一様ではない。さらに、その形態も石を主体に構成されるが一定ではなく、尖った板状石や柱状石、奇岩や溶岩等を単体ないしは複数立てて祀るものもあれば、浜の丸石を立てたり積み上げたりするもの、板石を組み合わせた石室、石工が作製した石祠、それらを種々組み合わせるもの（組合せのバリエーションは無数にある）、コンクリートブロックを用いたものまで存在する。

果ては、石すらない場合もあり、八丈島中之郷での聞き取りの際に、最近祀られたという個人宅のイシバサマを拝見したが、木の根元に御幣が立てられているだけのものであった（こうした事例は本稿では除外しているが、石がなくとも「イシバサマ」とされるというのは、「イシバ」に祀られるカミの性質を考える上では非常に興味深い問題である）。

また、イシバには水甕が供えられることが一般的であったようだが、替わってガラス瓶（酒瓶）やブリキ缶が多く納められるようになり（東京都教育委員会編 1960b、大間知・金山・坪井 1966、蒲生・坪井・村武 1975）、現在では水を入れたペットボトルも散見された。言うまでもないが、これは容器が重要ではなくて「水」を供えるという行為に意味がある。また、石（自然石・石祠）の前に供えられる小鳥居も木製・金属製の他に、青ヶ島では塩ビ管製のものも見られた。

コンクリートブロックの石組やイシバに建てられたコンクリート社殿もそうであるが、こうした状況に古風が失われたなどと幻滅を感じる部外者も多いかもしれない。もしも、現代の考古学者が発掘したならば、表層にあるそれら現代の生きた「遺物」は攪乱ないしはガラクタとして捨てられる憂き目にあうだろう。しかし、その時々我真新しい素材が用いられているだけであって、自然石の代わりに石祠が置かれるのと同様に、イシバの本質は失われていないと見るべきである。（石井）

（2）調査研究の射程と方法

調査研究の目的

第1章でも述べたとおり、伊豆諸島における石信仰に係る考古学的調査研究は、本学考古学研究室及び学術資料館考古学部門が一貫して推進してきた研究テーマの一つである。ただ、物質文化研究が中心の既往の考古学は、精神文化研究に不得手であり、石信仰の究明という点においては方法論的に限界がある。

本年度で終了を迎える本学の伝統文化リサーチセンターの事業は、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」というテーマを推進することが眼目として掲げられてきた。その内実は3つに分けられたプロジェクトによって構成されているが、本分布調査研究報告は、その内の考古学を専門とする研究員を擁する「祭祀遺跡に見るモノと心」グループによる研究プロジェクトの調査研究成果のひとつである。したがって、「モノと心」という物質文化研究と精神文化研究を結ぼうとする研究においては、考古学に限らず、領域横断型の学際的研究が必要不可欠であり、時代・地域・国を越えた比較文化研究を目指す石信仰研究においては言うまでもない。

本稿が目指すのは、イシバという今現在生きている神聖なる場所を基点として、「モノ」の研究と「心」の研究との間の橋渡しを目的とした基礎固めである。第1章で列挙したように、伊豆諸島におけるイシバに係る物質文化研究については、本学の考古学分野において、中世まで遡り得るイシバの考古学的情報を蓄積してきている。一方、前項で一端を見てきたが、本学教授を務めた坪井洋文をはじめ、伊豆諸島におけるイシバに係る精神文化研究については民俗学が膨大な調査研究を積み重ねている。

ただし、「モノ」を主対象とする考古学においても、「心」を主対象とする民俗学においても、情報の過不足と盲点がある。前者は、イシバに対する物質文化的情報が決定的に欠けており、精神文化的情報は豊富であるが濃淡がある。後者は、発掘調査の対象となるイシバが遺跡であるが故に、精神文化的情報が決定的に欠けており、物質文化的情報は豊富であるが点的情報に過ぎない。

両者に橋を渡し、両者の資料を活用しつつ、発展的研究を行う手立てとしてはさまざまな方法が考えられるが、考古学の側から接近するには、まずは、基礎的作業として、これまでなされたことのない伊豆諸島全域におけるイシバの面的位置情報のGPS測定と、物質文化研究の観点からのイシバの現状実態の把握が必要となる。

そこで、今回は八丈島・青ヶ島のイシバを対象とし、その位置情報と実態とを報告することにした。そのため、イシバの事実記載のみならず、カラーでの掲載が叶わないものの写真図版に大幅なページを割いている。

とはいえ、力量不足のため他分野の研究者にとっては必要な情報の遺漏が多くあることは否めないが、願わく

ば本調査成果がさまざまな分野に活用され、石信仰研究の方法に一石を投じることになれば幸いである。なお、完全網羅は成しえていないものの、既に三宅島・新島・式根島・利島における一定のイシバ情報は把握済みであり、未報告分については近年中に何らかの形で公表していく。

調査の方法と報告の記載

まず、分布調査にあたる前に当該地域に係る文献・古地図・インターネットでの調査を行い、踏査候補地を選定した。その際、参照したのは主として『伊豆諸島文化財総合調査報告』第3・4分冊（東京都教育委員会編 1960a, b）、『八丈島末吉地区文化財調査報告』（東京都教育庁社会教育部文化課編 1981）、『大里地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』（東京都八丈町教育委員会 2001）、『青ヶ島の生活と文化』（菅田 1984）、首都大学東京図書情報センター所蔵『水野家文書』『伊豆七島絵図』の内「八丈島之図」「青ヶ島之図」、島おこし協議会事務局作製『八丈島総合ポータルサイト』内「観光情報」（<http://www.8jyo.jp/kankouinfo/index.html>）等である。

八丈島のイシバの踏査候補地は三根地区21地点、大賀郷地区33地点、檜立地区22地点、中之郷地区27地点、末吉地区42地点の計145地点、青ヶ島では49地点を数えた。踏査によって新たに発見した地点も複数あったものの、地点特定に至ったのは八丈島で5割程度、青ヶ島では3割にも満たず、多くは確認できずに終わっている。

その主な理由は、古地図記載の地名が現存しなかったり、候補地が森林に覆われてしまっていたり、地形変化によって立ち入ることができなかったり、短期間調査の中で聞き取り調査に不得手な考古学を専門とする調査メンバーであったために、文献記載の地点を特定できなかったりなどしたことによる。また、踏査の結果、地点が特定できても、その場にイシバが存在しない候補地も少なくなく、個人宅敷地内の屋敷神等にいたってはほとんど手つかずのままである。

したがって、八丈島のイシバ・石祠を悉皆的に網羅し得たとは全く言い切れず、本稿で以下に記述する地点以外にも、イシバや石祠が島内に無数に存在するのは確実である。とはいえ、八丈島においては、イシバを主眼とした全島域の分布調査は未だ報告がなされたことがないため、一定の成果は収めていると思われる。

以下、八丈島・青ヶ島における分布調査で確認し得たイシバの概要を地点毎に記述する。小見出しに記載した各地点の「No.」は両島のイシバ分布地点図（図2・9）、八丈島の分布詳細地点図（図3・6・8）のポイント、および表2の「No.」と対応している。本文中、対応する写真図版の通し番号を括弧内に示した。紙数の都合上、図版を省略した地点もある。なお、版面の都合上、広域分布図（図2・8）では複数の地点が存在してもドットが重なるために同一地点としている箇所もある。（石井）

第1節 八丈島のイシバ

（1）三根地区

No. 1 浅間神社（図版2～3；通番3～13 ※以下、写真図版に限って括弧内に対応する図版の通番を付す）

八丈島北西部の西山（別名・八丈富士：標高854.3m）の火口内に位置する（通番3）。社殿はなく、近接する2地点にイシバが確認された。イシバ①：「巳」銘のある鳥居（通番4）の手前右手側には、一定範囲に長方形の石垣が築かれており、その中央付近に巨岩（通番5）がある。イシバは巨岩下や、その周辺および石垣に沿って複数点在している。草木が生茂っているため詳細の把握が困難であったものの、柱状・板状節理の立石、小丸石、小石祠、金鳥居等で構成される（通番6～8）。[採集遺物：図12・11、表1参照]。

イシバ②：「巳」の鳥居をくぐると、すぐに木製鳥居が立っている（通番4・9）。鳥居の右脇には、カラーペンキで安産や縁結び、安全祈願などの願い事が描かれた人頭大の浜石や丸石がいくつも転がっていて、「2009」「2010」「平成23年」等の記載が見られる（通番10）。また、鳥居下には大小の丸石が積石状に敷かれ、複数の小石祠を中心に柱状・板状節理の立石や金鳥居が密集している（通番11～13）。

『八丈實記』第二十五巻の同社に比定できる「富士神社」の記述（近藤 1970「第一編」）、及び東京都教育委員

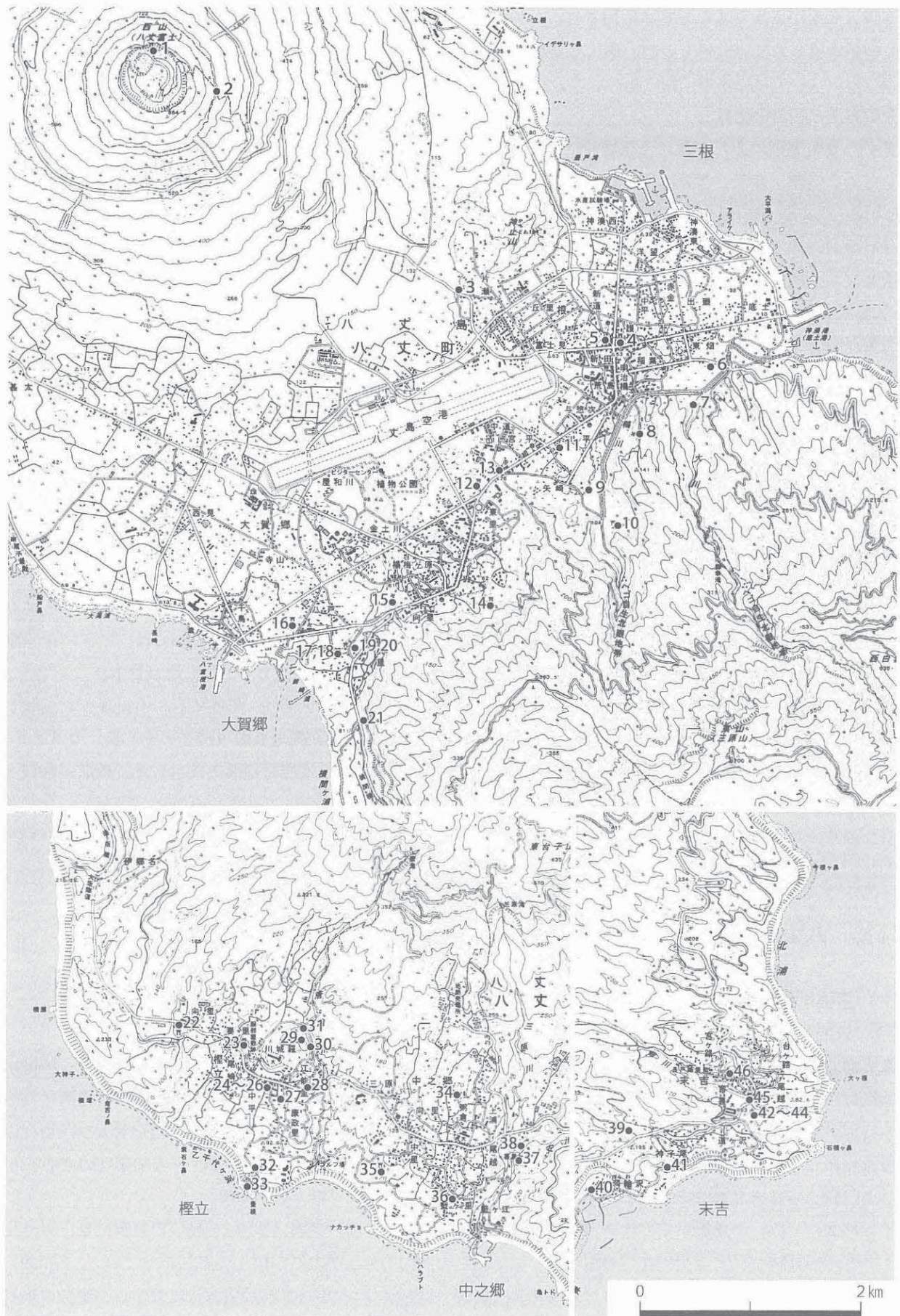


図2 八丈島のイシバ分布地点

会の『伊豆諸島文化財総合調査報告』(田村・金山 1960; 以下、総合調査報告)によると、文政8(1825)年の刻銘がある石の「宝殿」(高さ四尺余、幅二尺余)と、弘化3(1846)年の刻銘がある「石室」があるとされる。写真で確認しうる範囲では、イシバ②の文字が刻まれる立石が該当すると思われる(通番13; 右の立石)。後者は、写真からイシバ②の石祠に確認できた(通番11; 最右の見切れた石祠正面に刻銘)。

また、『総合調査報告』には『八丈實記』第二十五卷(近藤 1970)からの読み下し引用と思われる前者の由来として「昔、頂上に台場と称する石場あり、幣帛を捧げても野牛が荒らし、後に大賀郷の村長となった菊池勘次郎氏が21歳の時、富士(西山)詣りをして、このありさまをみ、若者42人をさそい、山上に新たに地を選び、石垣を築いて、入口を平石で覆い、野牛の入るのを防ぎ、大賀郷前崎から大石を運んでまつた」との言い伝えがあるとされている(田村・金山 1960)。この伝承に該当するのは石垣のあるイシバ①であろうから、刻銘のある立石は移動されているのかもしれない。

また、本社はかつては9月23日が祭日で、5ヶ村から島民が玉石をもって登山したという(近藤 1970)。この風習は『八丈島誌』には「お富士詣り」として解説されている。「カケソ」(祈願)と祈願成就のお礼詣りや、男児の七歳・十五歳・二十歳時に行うもので、浜で潮垢離をとる際に海中から年の数だけ石を拾い、「山頂にいたる途中にある休み場」(ここに末社のNo. 2が鎮座する)には小さい石を納め、山頂に大きい石を納めるのだという(東京都八丈島八丈町教育委員会 2000)。願い事をペイントした近年の願掛け石は、その風習が今も形を変えながらも継承されていることを示しているのだろう。なお、末吉地区では、かつて八丈富士を「タカガミ」と呼んでいたようである(郷田(坪井) 1960)。

No. 2 浅間神社末社(図版3; 通番14・15)

西山中腹、登山道の路傍に位置する。尖った板状の立石が一本祀られ、その前に金鳥居と小ぶりの丸石が複数供えられている。丸石はお富士詣りの際の小さな垢離取り石であろう。

No. 3 浅間神社(図版3; 通番16・17)

都道216号線富士山道入口交差点を富士山道に入って、300mほど北上した右手路傍(西山麓)に位置する。すぐ手前に片瀬ヶ首配水場がある。積石状の大小の丸石で構成されるイシバである。丸石はお富士詣りと関連するものであろう。近年に立てられた大理石の石碑に「浅間神社 祭神 木花咲耶姫」と刻銘があるが、鳥居左奥に新しい作りの石祠が1基あり、その刻銘には「お富士大権現/金山様/八幡宮様/大神宮様/出雲様」と併刻されている。また、どのような意味があるのか不明だが、鳥居には小さな鈴が複数掛けられている。

No. 4 天照皇大神宮【別称・荒島護神】(図版4; 通番18~23)

都道216号線と底土通りが交わる護神交差点の北東に位置する(通番18)。小高い山の上に社殿がある。社殿前庭には、断崖縁に溶岩立石が石垣のように立ち並び、その前に多数の小石祠(刻銘未確認)、丸石、柱状・板状節理の立石等が祀られるイシバが形成されている(通番20・21)。社殿右手から裏手に回る「金毘羅神社」とされる大ぶりの石祠が中央に祀られている(通番22)。また、この背後に異方位を向く石祠が1基あるが、金毘羅と同一か未確認である(通番23)。

No. 5 牛捕仲間安全祈願の碑(図版5; 通番24・25)

護神交差点五差路の北西へ向う道を、数十m進んだ左手路傍に位置する。複数の石碑と小石祠、若干の自然立石で構成される。石碑には天保10(1839)年と明治34(1901)年の刻年がある(葛西 1990)。なお、坪井洋文撮影と思われる半世紀前の写真と比べると、現状はかなり変わっている(蒲生・坪井・村武 1975)。

No. 6 八郎神社【別称・忠次郎祠(様)】(図版5; 通番26~29)

都道215号線沿いの供養橋手前に位置する。路傍に「八郎神社」の新しい石碑が立っているが、その脇の階段を登り、小路を入っていくと奥の林の中にイシバがある。由来は、保元の乱後、大島に流刑された源為朝をめぐる所謂「為朝伝説」に関わるもので、為朝の家臣「忠次郎」が一矢で白鷺を射落としたために、彼の腕前が自分より上回ることを恐れた為朝が殺し、ここに祀られたという伝承が残る(田村・金山 1960)。現在は、新旧の「忠次郎」刻銘の石祠・石碑が一角にあり(通番 26)、敷地内に複数のイシバが点在する(通番 27~29)。玉石を敷

き詰めるか、玉石で囲った小規模の範囲に、小石祠や立石を祀っているものが群を成している。板石や板状の溶岩を組んだ小規模の石室状のものも多数認められる。小石祠には「金山様」「石場様」等の刻銘が見られる。

№ 7 根田原神社（図版5；通番 30・31）

三根根田原の鴨川南岸に位置する。三根の供養橋から南西へ川沿いに350mほど進んだ地点だが、根田原二号橋と一号橋の間に細い橋があり、それを渡った先にある。角礫が積まれた「コ」の字状の石垣の中央に、入れ子状の石祠が1基あり、八臂弁財天が祀られている。祠周囲に中規模の玉石が敷かれる。祠の右片隅に耕作神である「作守様」刻銘の小石祠が置かれている（通番 31）。『八丈實記』第二十五巻によれば、宝暦3（1753）年に神体が造営され、祭神は「市杵姫命」、社地はかつて池であったらしく「当嶋草味ニシテ嶋ノ名モナキ時トカヤ、赤羽ノ大池ニ大地住ンテ日々小池ニアソビ人民ヲソコナフ勇士来リテコレヲ斬ル此池ニ弁天ト崇ム」と伝えられている（近藤 1970）。

№ 8 尾幡観音（図版6；通番 32・33）

三根尾幡に位置する。根田原神社から鴨川沿いに西へ500mほど進み、鴨川に架かる尾崎橋を渡って道なりに250mほど南下した左手にある。創建年代は不詳。昭和50年の台風で全壊した以前の堂は近藤富蔵の作とされる。旧暦の7月17日に祈祷が行われ、馬頭観音として信じる者が多かったという（田村・金山 1960）。堂の左手にイシバがある。玉石が敷き詰められ、3基の小石祠が祀られているが、確かに左手の石祠に「馬頭観音」の刻銘がある。石祠の背後には、卵形や三角形の自然石が立てられている。

№ 9 オボ地藏（図版6；通番34・35）

鴨川西岸の三根矢崎に位置する。鴨川の尾崎橋から700mほど南下し、水守橋の手前を右折した先、角礫で築かれた旧家の石垣の一角に祀られているイシバである。詳細は不詳。石碑に「オボ地藏」の刻銘がある。板状の溶岩で石室状の祠が組まれ、内部に地藏や立石が納められている。祠の前には、石垣の石材とは異なる丸石もすえ置かれている。

№ 10 八幡宮（図版6；通番 36～39）

オボ地藏から鴨川へ戻り、水守橋からさらに240mほど南下した橋を渡った奥にある。橋の袂に鳥居が見えるのですぐに分かる。はじめの祭神は不詳で、元禄8（1695）年の秋に大雨で流出した後、享保3（1753）年瀬宜金川与左衛門が石像の神体を建立、再建したと伝わる（近藤1970）。拝殿右手および背後の本殿両脇には2ないし3段の玉石垣が築かれ、その基壇上に大小の石祠や小石室、大小の板状・柱状の先の尖る立石群などが数多く林立しているイシバである。写真図版にはないが、境内を囲う玉石垣の隅にも立石群が複数存在する。コンクリートブロックを組み合わせた石室状のものもあり、イシバを築く際の石の選択性を考える上では興味深い。

№ 11 六地藏（図版省略）

三根川向のクラブやスナックの立ち並ぶ通称・親不孝通りに位置する。同地区の善光寺にある一字一石供養塔（天保6年）の原位置とされる。（石井）

（2）大賀郷地区

№ 12 護神山（図版7；通番 40～45）

八丈町役場の北東、都道216号線の三叉路の辻に位置し、八丈富士（西山）の寄生火山の一つである小高い山の護神山公園に鎮座する神社である。参道入口の石碑には、右から「牛頭天王／須賀社／天照皇大神宮／金毘羅神社／為朝神社／稻荷神社」が併刻される。玉石敷きの参道の両脇には、木の根元を丸石で囲い、御幣や金鳥居を立てる複数点在する。参道を進み、玉石の階段を昇っていくと、コンクリート製の社殿に行き当たる（通番 41）。社殿手前下段に3段の玉石垣が築かれ、その基壇上に大小の石祠や立石が群をなすイシバが形成されている（通番 42～44）。また、護神山を周回する歩道を進み、社殿の裏手に出ると、社殿背面に社殿とは真逆を向く「天照皇大神宮」と刻銘された小石祠が、丸石積の上に金鳥居と共に祀られている（通番 45）。

No. 13 崇福寺近傍のイシバ (図版7; 通番 46・47)

崇福寺は護神山の北東のすぐ裏手、都道216号線に面して位置する浄土宗の寺である。イシバは本堂に向って右手の道路に面した民家の石垣外側に築かれている。ちょうど三根と大賀郷の字界にあたる地点で、イシバの位置は厳密には三根地区に属する。玉石区画内の小石祠と立石で構成される。石祠の手前には石臼状のものが供えられ、背面に居た先端の尖る板石、左右に溶岩の奇岩が立てられる。石祠には冒頭の一字が判読できないが「□石場明神」と刻されているため、おそらく、テイシバの「テ」にあてられる「手」か「庭」であろう。

No. 14 横嶺山薬師堂 (図版8; 通番 48~51)

八丈島郵便局のすぐ脇、都道215・216号線が合流する交差点の南へ向かう細い道を、道なりに400mほど進んだ山側に位置する。創立年代は不詳で、源頼朝や足利善政が鰐口を奉納したことがあると伝えられ(東京都八丈島八丈町教育委員会 2000)、明治の神仏分離で寺持ちになったという(田村・金山 1960)。境内は角礫の石垣で囲われているが、本堂裏手や本堂左手の石垣上に石祠や石室、立石が夥しく並ぶイシバが形成されている。各石祠には「五社大明神」「金山様」「大神宮/新玉様/木玉様」等の刻銘が見られる。

No. 15 抱鱸長女石場【別称・^{ろかこみによこ}丹那婆^{たなば}の墓】(図版8; 通番52~55)

八丈島歴史民俗資料館の対面にある北東へ向かう小路を、130mほど進んだ右手の釈迦堂境内の一角に位置する。本堂に向って右手前にある積石塚である。三宅島の積石塚を彷彿させるが、大小の丸石が積まれ、中心に繭形の丸石が立てられている。釈迦堂の元は永享年間もしくは文安年間に開創されたと伝えられ、当イシバは『八丈實記』第二十六巻に「釈迦堂境内 抱鱸長女古墳」と記され(近藤 1970)、同書第一巻では「釈迦堂 抱鱸長女石場」と記されている(近藤 1972)。

ちなみに、抱鱸長女ないしはタナバ(丹那婆)は、八丈島の始祖伝説に登場する「タナ」という女性である。大昔、八丈島が天津波に呑まれた時、たった一人、船の櫓を握りしめて助かったのがタナで、既に孕んでいた子・太郎と夫婦になり、子孫を増やすことで八丈島の先祖となったと言われている。別名「ロカコミニョコ」というのは(ニョコは八丈の方言で「長女」の意)、櫓を抱いて助かったことから呼ばれるという(浅沼 1965; 「タナ婆の話」節)。島内にタナバの墓は3カ所あるらしいが、三根地区のものは不明で、末吉地区のものは石碑が立てられているのみである。

No. 16 弁天山 (図版9; 通番 56~59)

八重根漁港に面した都道216号線Y字路辻に位置する小高い山である。入口の鳥居をくぐると登山口手前の参道脇にイシバが点在している(通番 57)。写真図版で示したのは一部でしかないが、丸石の円形区画内に小石祠を祀るものや、溶岩で組んだ石室状のもの、角柱状の立石がいくつも見られ、木の根元に丸石と御幣が立てられるもの、御幣を立てて球状の浜石を祀った丸石神のようなものも見られる。

玉石敷きの参道を登り切ると、山頂には玉石垣に囲われた中央に、コンクリートブロック製の社殿が建っている(通番 58)。石垣上には複数の小石祠が点在し(通番 59)、木の根元が丸石で囲われたり、丸石自体が祀られたりしているものもある。各小石祠の刻銘には「不動尊」「金刀比羅宮/沖之明神/途中之明神/港明神」「コンビラ様/沖明神/万仲明神」「辨天様」等が認められる。また、社殿内左隅に丸石が祀られている。

No. 17~20 優婆夷宝神社とイシバ群 (図3・4, 図版9~11; 通番 60~75)

八丈島イシバ分布図(図2)ではポイントが重なっているが、この4地点は、八丈島・青ヶ島の総鎮守・優婆夷宝明神社境内に隣接する、社殿のないイシバである。既に八丈町教育委員会によって詳細な調査がなされており、『大里地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』(以下、『大里地区報告』)に測量平面図も公表されているが(図4; 東京都八丈町教育委員会 2001原図改編)、これらの詳細位置を図3に示す。

西から「磯神社」(No. 17)、「三島神社」(No. 18)、優婆夷宝明神社を挟んで東に「稻荷大明神」(No. 19)、「松尾神社」(No. 20)が並列するとされる(同掲書)。これらの「社」のない「石場」は『八丈實記』第二十五巻では現在の優婆夷宝明神社の境内末社とされるが、その神社名及び祭神名は異同があり、「地理部第三之下」の「神職奥山氏現存古文社記云」では「松尾神社 月夜見命」「稻荷神社 倉稻魂命」「三嶋神社 大山祇命」「磯神社 住吉

大神」とある（近藤 1970）。また、同書同巻「神社古跡明細記」では「大里神社」の「末社四カ所」として「天道庁／伝云 日読尊 月読尊」「稲荷社 石宮」「三嶋社／（中略）／祭神 伊豆三嶋神社」「竜王社／（中略）／祭神 伝云、善女竜王 八大竜王 応誉妙竜」とされている（近藤 1970）。

ちなみに、優婆夷宝明神社は『伊豆海島風土記』（樋口校訂 1974）には「老婆明神」（天照太神）・「宝明神」（大山住神）を祀り、勧請年歴は不詳とある。『八丈實記』第二十五巻では、優婆夷神社の祭神は「天照皇太神」、「宝神社」は「伊豆国三島神社ヲ勧請 大山祇命也」とされ、永享11（1439）年に領主金川宗麟が二神を再興し、享保8（1723）年に正一位を免許されたという（近藤 1970）。

また、優婆夷社は延喜式の伊豆国賀茂郡優婆夷命神社に、宝明社は許志伎命神社に擬せられる（土岐 1981a, b）。現在の一般的な祭神の説明としては、事代主命の妃である優婆夷姫（八十八重姫）と、その子・古宝丸（許志伎命）の二神が祀られているとされているが、『三宅記』の伝承を重視するならば、祭神は三嶋大明神の後である「イナハエ」（八十八エ）と、その子「五郎丸」となる（三橋 1978、土岐 1981a, b）。また、この母子二神は八丈島・青ヶ島に伝わる母子始祖伝承とも通底しているようで興味深い。

No. 17 磯神社[別称・出雲様]（図4-1、図版9；通番 60～63）

優婆夷宝明神社境内の西端に位置する（図3）。道路に面した鳥居をくぐり、玉石垣の狭い参道を突き進むと、参道より一段低く掘り込まれ、玉石垣で楕円状に形成されたイシバに行き当たる（通番 61）。その中央に丸石が塚状に積み、石祠が祀られている（通番 62）。『大里地区報告』では、この祠を「磯神社」としているが、石祠手前の鳥居には「出雲様」の記銘もある。楕円形状玉石垣の上や東側に張り出した玉石垣上に、多数の小石祠が祀られている。『大里地区報告』では小石祠の刻銘を以下のように列挙している（括弧内の数字は町教委が確認した刻銘の件数、1基の祠に複数の刻銘がある場合も各々1件としてカウントされている。以下No. 18～20も同様）。「出雲神社（1）、出雲様（1）、金山様（8）、金山彦命（1）、手石場様（2）、手石場大明神（1）、金毘羅大権現（2）、天照皇大明神（1）、木玉様（1）、八天狗様（1）、新神様（1）、御富士様（1）、御富士権現（1）、本八幡様（1）、ウバ大明神（1）、竜玉宮（1）」（東京都八丈町教育委員会 2001）

さて、このイシバで既報告では触れられていない重要な点を列記しておく。まず、中央石祠の左手小石祠の背後に先の尖った三角錐状の立石が祀られている（通番 62・63）。次に、中央中心石祠の真後ろの石垣際に台状の平たい楕円石が置かれ、台石の左手には、2本の先の尖った棒状石が石垣に立て掛けられている（通番 63、図4-1-★）。また、台石右手の石垣上には板状の溶岩で組まれた小石室が祀られている（通番 63）。同様の尖った立石や小石室は、東側石垣区画内にもあるが、こちらの立石は玉石垣に組み込まれるようにして立っている。石祠の背後に自然石が祀られる事例は、他の地点にいくつも認められるが、中世寺院の「後戸の神」を彷彿とさせる。おそらく、背後の立石がイシバの本来の御神体なのだろう。

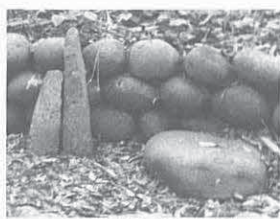
No. 18 三島神社[別称・戸隠神社]（図4-2、図版10；通番 64～67）[採集遺物：図12-1、表1；別調査採集]

優婆夷宝明神社の西側に隣接し（図3）、『大里地区報告』では「優婆夷宝明神社の境内敷地から玉石垣5段分下がった敷地」とされる（東京都八丈町教育委員会 2001）。道路に面した鳥居をくぐり、右手の玉石垣伝いに進むと、参道より一段低く掘り込まれ、玉石垣で正形状に区画されたイシバに行き当たる（通番 64）。

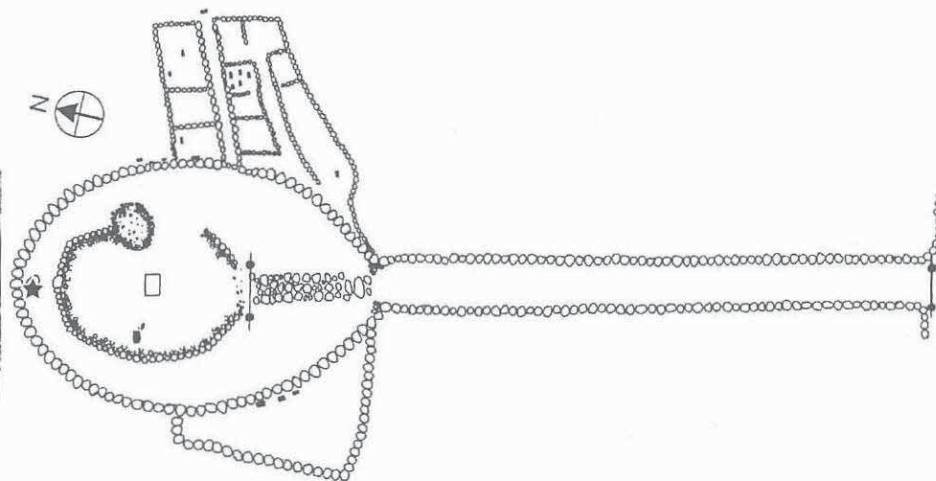
中央に玉石による方形基壇が構築され、その上に大小4基の石祠と1本の板状の尖立石が祀られている（通番 65・66、図4-2-★②）。周囲の玉石垣上には、丸石の立石や多数の小石祠が祀られているが（通番 67はその一部）、『大里地区報告』では小石祠の刻銘を以下のように列挙している。「戸隠神社（1）、金山様（3）、優婆夷社



図3 八丈島大賀郷地区イシバ No. 17～20 詳細地点



★:最奥部の立石と台石



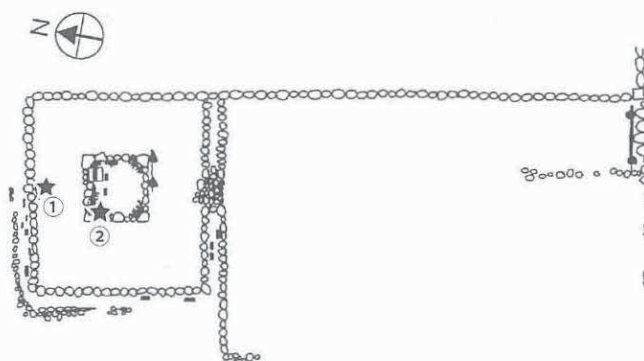
1. 磯神社 (No.17)



★①:最奥部の角柱立石と丸石



★②:三角錐状立石



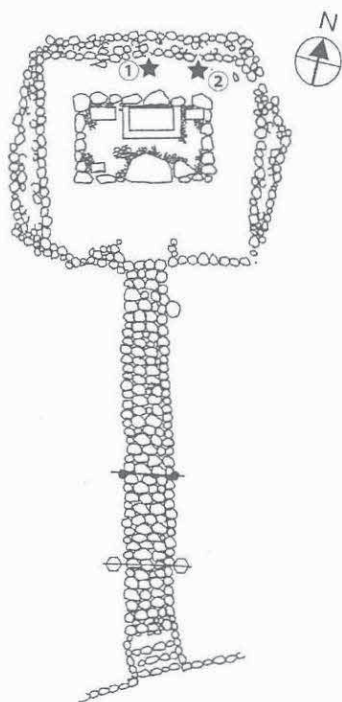
2. 三島神社 (No.18)



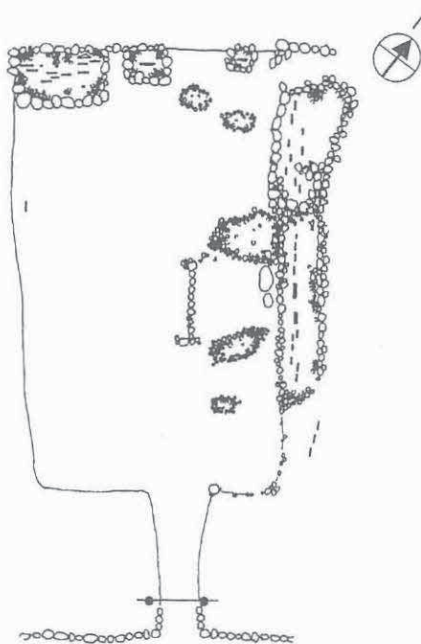
★①:三角錐状立石



★②:角柱立石



3. 稲荷大明神 (No.19)



4. 松尾神社 (No.20)

S=1/250(平面図)

図4 優婆夷宝明神社近隣イシバ No. 17~20 平面図と自然立石

(1)、優婆夷御世様(1)、寶明神社(1)、寶大明神社(1)、三島大明神(1)、底石場明神(1)、木玉様(1)、天之半玉様(1)、出雲様(1)、金毘羅様(1)、天照皇神宮(1)、八幡宮(1)、住吉宮(1)、春日大明神宮(1)」(東京都八丈町教育委員会 2001)

また、No.17の磯神社と同様に、中央石祠の背後には一本の細長い柱状立石が祀られており、この立石の根元右隣りには、表面剥落が見られる丸石が不自然にひとつだけ置かれている(通番 66、図4-2-★①)。丸石には御幣や金鳥居などは添えられていないが、立石と対のもののように思われる。

No. 19 稲荷大明神(図4-3、図版10;通番 68~71)

優婆夷宝神社の東側高台に位置する(図3)。神社正面三叉路を右折したすぐの未舗装の小路に入る。そのすぐ左手に玉石階段と鳥居がある(通番 68)。参道は玉石が敷き詰められているが石垣はない。イシバの空間はNo.17・18とは異なり掘り込みはなく、玉石垣も他は整然と高く積み上げているのに対し、ここでは数段低く、「石垣」というよりは聖域を区画するという程度のものである(通番 69)。中央に大小の玉石や板石が積まれた方形基壇が築かれ、手前に石灯籠が1基、奥に3基の石祠が祀られる。『大里地区報告』では石祠の刻銘を「稲荷大明神(1)、不動尊(1)」としている(東京都八丈町教育委員会 2001)。

No.17・18と同様に、石祠背後に立石が祀られている。中央石祠の背後には、先の尖った三角錐状の大形立石があり、根元に丸石が埋もれている(通番 70、図4-3-★①)。右手石祠の後方には、丸石積の中心に柱状節理の棒状石が立っている(通番 71、図4-3-★②)。

No. 20 松尾神社(図4-4、図版11;通番 72~75)

No.19の東に隣接している(図3)。他のイシバとは構造が異なり、イシバは広い窪地内の東側と西側に集中している(図4-4)。東側には、窪地の斜面に玉石積の基壇が築かれている(通番 73・74)。西側は玉石を積み上げた塚状のイシバが複数あり、No.17~19の基壇と比べるとこんもりとしている(通番 75)。どちらも基壇上に石祠や石室が多数祀られ、その背後に立石も複数認められる。『大里地区報告』では小石祠の刻銘を以下のように列挙している。「金刀比羅様(5)、金毘羅守神(1)、金山様(3)、木玉様(2)、三日月様(2)、天陽様(2)、天道様(1)、日天様(1)、月天様(1)、木玉新玉様(1)、八幡大神(1)、辣天神社(1)、三夜様(1)、三申朗様(1)、真神大明神(1)、口朗様(1)、御富士様(1)、天狗様(1)、住吉様(1)、酒王天宮(1)、葉山八宮(1)、大日賀口命(1)」(東京都八丈町教育委員会 2001)

No. 21 為朝神社[別称・八郎大明神](図版11;通番 76~79)

都道215号線を大賀郷から檜立へ向けて南下する途中、横間海水浴場へと向かう道とのT字路合流地点に位置する。はす向かいの小高い山上に城山遺跡が位置する。鳥居手前の案内掲示板には、為朝伝説とともに「此処は為朝遺跡の集約されている場所で、神社、腰掛石、耳跡の石、城跡、為朝が射抜いて造った隧道上の切り通しがあり、神社上の断崖にも伝説がある」と記されている。道路に面した入口の鳥居の左右の根元には、自然石が複数立てられる。鳥居左手に板状や玉石で組まれた小石室状のイシバがある(通番 77・78)。参道の石段を進むと、巨岩を背にして、玉石垣で囲われた方形基壇上に小石祠(刻銘未確認)や立石が立ち並ぶ(通番 79)。(石井)

(3) 檜立地区

No. 22 三島神社(図5、図版12;通番 80~87)[採集遺物:図12-10~14、表1;別調査採集]

為朝神社(No.21)から都道215号線を南下し、「檜立温泉前」バス停の南側(海側)に張り出す舌状丘陵に位置する。小高い山頂付近一帯が社地である(通番 80)。現在、都道から神社に参詣するのは容易だが、昔は南側の山裾から断崖を登る道が参道だったという(図5;西隅)。旧参道は石段が残存してはいるものの、急峻な坂道で登り降りには困難を極める。

『八丈島誌』によれば、奥山宗林が永享11(1439)年に伊豆国三島神社から勧請し、「家居郷」(永郷※島北西海岸の三根と大賀郷に跨る旧地区名)に建立したものを、大津波に見舞われた際に、各村に分神したと伝えられる内の一社とされる(東京都八丈島八丈町教育委員会編 2000)。『八丈實記』第二十五巻では「庁の山」の「三嶋

神社」とされ、略図には「石坂」(旧参道)の左手に「末社 石場」と記載されている。また、「神体 金銅高サ一尺五寸 幅一尺二寸／祭日 十一月中ノ酉日／撰社 日之神 風之神」とある(近藤 1970)。

境内は山頂部を背にして南側が大きく方形に掘り込まれ、その壁に板状石や角礫を積み上げた石垣が築かれ、鳥居左右の根元には多数の立石が密集している(図5、図版通番 82)。社殿を囲う石垣上の尾根部一帯がイシバとなっている。西側のイシバは板状・柱状石が累々と積み重ねられ、立石の数も夥しい(通番 83~85)。西側イシバの北奥の山頂傾斜面に石祠が集中して祀られている(通番 86)。東側には板状石は少ないが、石祠が多く祀られている(石祠刻銘は図5参照)。社殿の背後と東側面の石垣上には、板状の立石が列を成している(通番 87は東側)。

No. 23 大神宮(図版13; 通番 88~95)

三島神社から都道215号線を東へ500mほど進むと、左手に鳥居の背後にこんもりとした小高い山が見えるが、その山頂に位置する(通番 88)。階段上の鳥居から50mほど進むと右手の一角に社殿が見えるが、素通りしてさらに80mほど玉石敷きの参道を登りきると、山頂に「コ」の字状に玉石垣で囲われたイシバが築かれている(通番 89)。コンクリート製社殿の手前左右(石垣の両端部)には、門柱のように大ぶりの尖立石が密集している(通番 90・91)。社殿の右手奥隅には、石垣を利用した板状石による石室があり、内部に石祠(刻銘未確認)が祀られる(通番 92~94)。また、社殿に向って右手立石群の手前に、板状石を組んだ小石室が祀られる(通番 95)。

No. 24 金刀比羅神社・不動堂(図版14; 通番96~103)

榎立郵便局から都道215線を100mほど進んだ角(夏場のかき氷が絶品の「そば千両」の向い)を右折し、突き当たり左手に位置する(通番 96)。詳細地点を図6に示す(以下、No. 28迄)。元々不動堂が祀られていたこの地に、文化10(1739)年に旧家の服部屋敷から金刀比羅神社が遷座されたものという。玉石垣の一段高い場所に社殿と本堂が並んでいる。境内左手の朱塗りの社殿が金刀比羅神社だが、社殿手前の玉石垣左手片隅に板状石が立てられている(通番 97・98)。中央のくびれを持つ石の姿形は三宅島富賀神社の「三嶋様」と呼ばれる溶岩立石に良く似ている(廣瀬 1987、深澤 2009)。社殿と本堂の背後は、さらに一段高い民家の敷地と隔てる石垣で囲われているが、金刀比羅社の左手は玉石、背後は板状石で築かれ(通番 99)、不動堂の背後は板状石よりも溶岩や角礫の比率が高まる。

主たるイシバは上記以外に3カ所ある。ひとつは、金刀比羅神社左手の一角にある小石祠群(通番 99)、もうひとつは、不動堂右手の「不動堂改築記念碑」立看板裏手の尖立石・丸石の集石(通番 100・102)、さらに、記念碑の右手奥の石垣末端に立つ巨樹根元に、先の尖った板状石の集石がある(通番 100・103)。また、興味深い

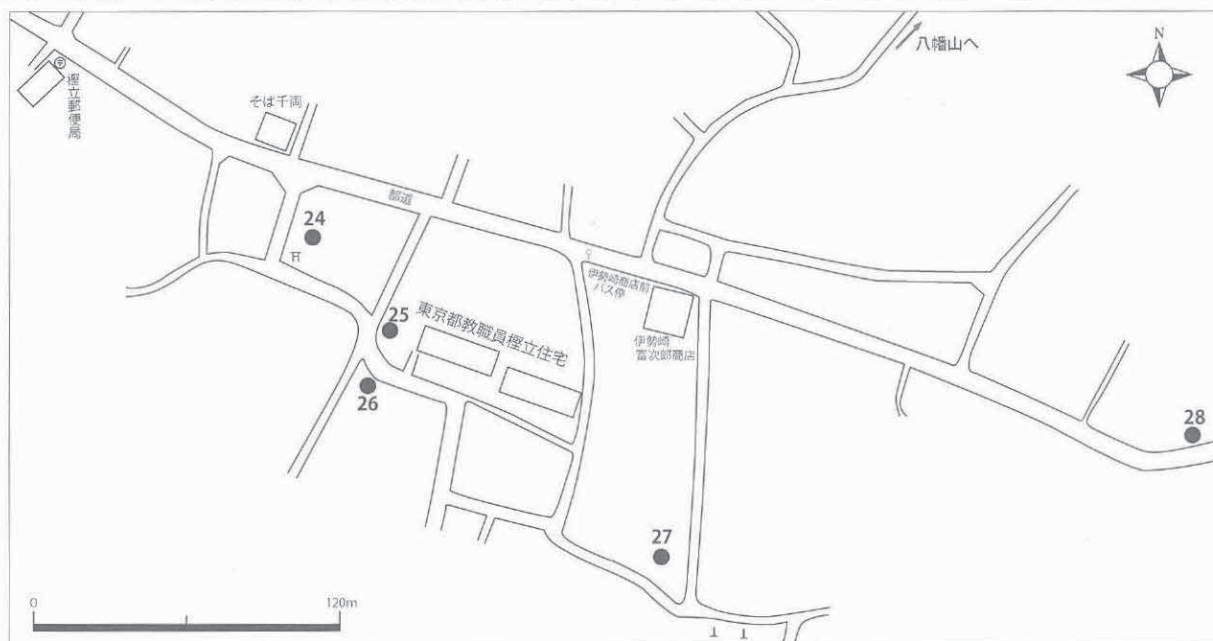


図6 八丈島榎立地区イシバ No. 24~28 詳細地点

のは不動堂の真後ろに、不自然な板石と溶岩の小集積が認められる点である（通番 101）。石垣から転がり落ちた石が集められているだけのようにも見えるが、同様の事例は新島本村や若郷地区の神社にも複数認められる。石祠や社殿の背後に、立石や集石が設けることにどのような意味があるのか不明であるため、聞き取り調査が必要であるが、八丈島だけでなく北部伊豆諸島にも認められる風習である。

No. 25 道六神【別称・道陸神】（図版15；通番 104～109）

金刀比羅神社を左手に、30mほど直進した角の高台に位置する（通番 104・105）。西側に隣接して峯ヶ郷の都教職員住宅があり、対面には庚申塔（No. 26）がある（図6）。急な石段を昇ると、大小の石祠や立石が林立するイシバが形成されている（通番 106）。立石は板状や先の尖ったものが多く、石祠の背後にも立てられている（通番 107・108）。小石祠の刻銘には「道六神」「道祖神」「猿田彦命」「金山様」「木玉様」「出雲神社」等が見られる。

『八丈島の民話』『道ろくじん』に次のような話がある（浅沼 1965）。乙千代ヶ浜から六尺ほどある石を、道ろくじんの御神体を選んで運ぼうとしたが、重くてビクともしない。そこで軽い石を運んで神体として祀った。ところが、その晩、浜の方から「ヨイコラサ、ヨイコラサ」という声が浜に行った人達に一晩中聞こえてきた。翌朝、巫女におがんでもらおうと、浜の大きな石が自分を祀ってくれと騒いでいるというので、大勢で行って運んで祀った、というものである。立石群のいずれかが御神体の大石なのであろうが、イシバ各地点の自然石の多くが乙千代ヶ浜（No. 33の項参照）から運ばれたものであることが窺い知れる。

No. 26 庚申塔（図版15；通番 110・111）

道六神の対面に位置する（図6）。庚申塔は八丈島には珍しいらしく「八丈町指定郷土資料」とされている。青面金剛の像塔が2基あるが、1基は板状石で組まれた石室内に納められている。中央石室の左手前にもう1基の像塔と、左右に板状の立石があり、右隣りには板石組の小ぶりの石室がある（通番 111）。

No. 27 弁天様（図版16；通番 112～117）【採集遺物：図12-10、表1】

道六神から都道に戻り、東へ右折して60mほど進んだ「伊勢崎商店前」バス停の手前を右へ入る。突き当たりを左折すると、その先にこんもりとした山が見え、その山頂に位置する（図6、通番 112）。鳥居をくぐり、急な石段を昇り始めると、すぐ右手に巨大な溶岩の磐座の裾が露出している（通番 113）。石段を昇りつめると磐座の前に立つ樹の根元にイシバが形成されおり、そこに「金山宮」刻銘の石祠が2基祀られている（通番 114・115）。小石祠の背後、樹の裏手は岩が挟れているが、「弁天様」と呼ばれるのは、これを女陰に見立ててのことだろうか。

磐座の左手は尾根状の地形となっており、その斜面に小石祠が6基群集している（通番 116）。刻銘は「金山様」（2基）、「庭石場大明神」（3基）、「大神宮様」（1基）が認められる。石祠群の左手奥の尾根上には、溶岩に板石を組み合わせた小石室がある（通番 117）。この手前の木の根元で遺物を表採した（図12-10、表1）。なお、参道から磐座下を周り込んだ南側の斜面には、水甕が放置されており、現在石祠が祀られている地点だけでなく、磐座周囲で祭儀が行われていたことを窺わせる。

No. 28 都道路傍のイシバ【名称不詳】（図版16；通番 118・119）

都道215号線「伊勢崎商店前」バス停から東方へ250mほど進むと、左へ曲がるカーブに差し掛かる（図6、図版通番 118）。カーブ沿いの左手に、玉石や角礫で組まれた石室が2基築かれている。内部に玉石が詰め込まれているが、イシバに相当するものか否かは定かではない。ただ、青ヶ島にも似たような形態のものがあ（第2節 No. 10・11・12）、「トーゲサマ」に相当するイシバの残骸かもしれない。

No. 29 八幡山（図版17；通番 120）

八幡山（標高229.5m）は東山（三原山）の寄生火山で、山頂には個別の参道を持つ八幡宮と稲荷神社が敷地を違えて同居し、両社の背後には、巨樹の根元に2群の自然石によるイシバが形成されている（図7、図版通番 126・127；詳細は①八幡宮で後述）。また、両社の参道入口が面している道路の路傍にはNo. 30・31のイシバがある。

① 八幡宮（図7、図版17；通番 121～127）

都道215号線「伊勢崎商店前」バス停の20mほど東を左折し（図6）、道なりに200mほど北上した突き当たりを右折し、30mほど進んだ左手に鳥居の立つ参道入口がある（通番 121）。長い玉石敷の石段を登りつめると、拓け

た山頂に至る。山頂付近を「コ」の字状に掘削した壁を、玉石垣で囲う空間にイシバが築かれている（通番 122）。石垣の両端部には、大ぶりの先の尖った立石群が門柱のように左右に密集している（通番 123・124）。左手の立石群手前には檉立自治会による立看板があり、当社の由緒が記されている。「山頂のナラミガ平に、東南を向いて金銅丈五寸の御神体が鎮座／一の鳥居から社殿まで続く玉石の階段は約一七〇メートル／正月十五日麓の江能里の人々が祭る（以下略）」

イシバは中央に方形石壇が組まれ、その基壇上に石祠が祀られている。中央石祠の右側面に「明治十三年服部翁次郎寄附金廿九円五拾銭ヲ（中略）」云々の刻銘があり、最後に「明治廿三年十一月」とある。中央石祠の左手奥にある苔むした2基の小祠には「八幡様」「金毘羅宮」「八幡宮」「水天宮」の刻銘があるようだ。中央石祠の右手にも小石祠があるが、刻銘は未確認である。基壇上のところどころに丸石が置かれている。基壇右手にも数枚の板石による基壇が築かれ、その上に石祠が祀られている（刻銘未確認）。

ところで、明治期に構築された石祠を中心とする基壇状イシバの背後、石垣を境に一段高くなった山頂域に巨樹が生えているが、その根元と西側に2群の集石（尖った板状・三角錐状の自然立石主体）が築かれている（通番 126・127）。このイシバは図7の略測図では平面プランが三角形状に表現されているが、埋もれている部分も多く、実態は詳らかではない。イシバの北側は深く掘削され、約1.7～8mほど低い位置に②稲荷神社のイシバが築かれている。要するに、二社の背面にこの自然石集積のイシバがあることになる。巨樹の根元のイシバは、根に吞まれているため原形を止めていないが、根元周囲一帯に立石が確認できる（通番 126）。西側の立石群は数列の列状立石によって花壇状のイシバが形成されているようにも見えるが、詳らかではない（通番 127）。

② 稲荷神社（図7、図版18；通番128～133）

八幡宮の北西に位置し、参道は八幡宮とは別にある。八幡宮の参道入口から山沿いの道を北に回り込んだ、ほぼ山頂の真北にあたる断崖に参道入口があり、玉石敷の急坂となっている（通番 128）。山頂部を深く掘り込んだ方形区画内に、板石組みの正方形基壇が築かれ、中央に大石祠、基壇四隅に小石祠と狐の像塔が祀られる（通番 129・130）。掘り込みの壁に石垣はほとんどなく、中央基壇の手前右手に板石垣が残る程度である。各小石祠の刻銘は図示してあるが（図7）、「稲荷様」「水神様」とある。中央石祠右側面には、八幡神社の石祠と同様の刻銘と「明治廿三年九月」の刻年がある。

また、由緒が刻された石看板には「八幡宮と背中合わせに北東を向いて鎮座、明和六年（一七六九）に勧請、稲の神として信仰を集めた。祠まで約一〇〇メートルの急な石段からは、かつて水田がひら

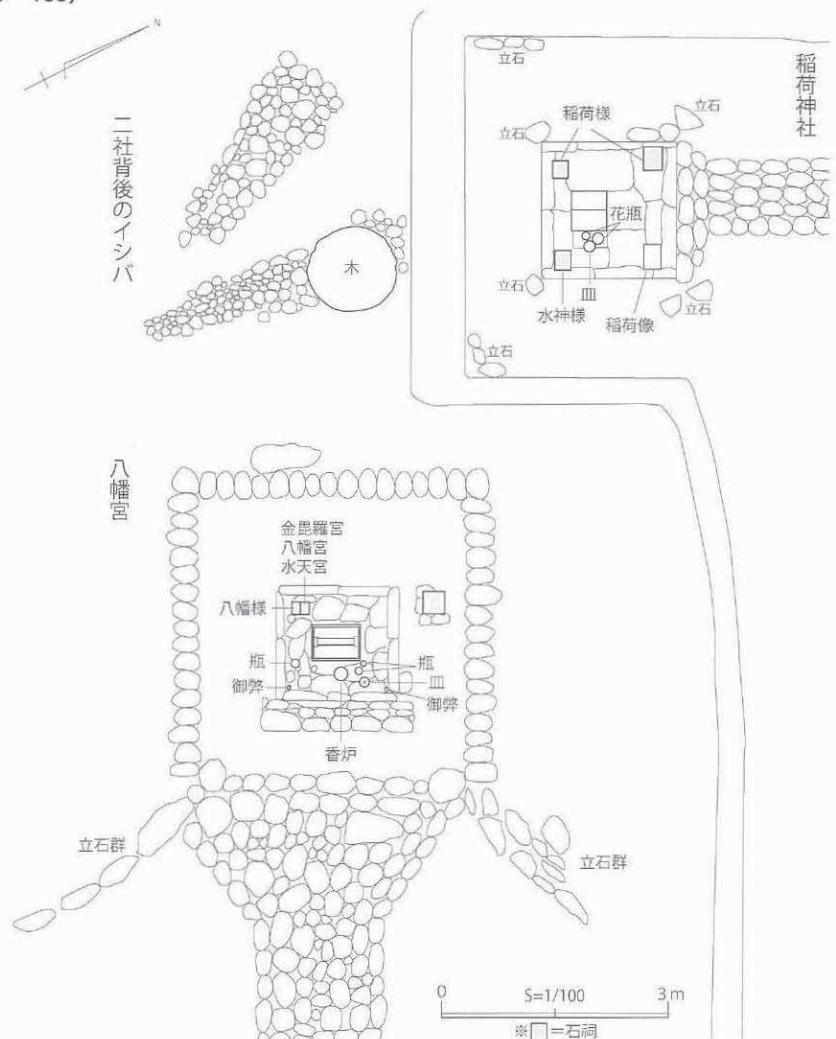


図7 八幡山山頂イシバ略測概念図（八幡宮・稲荷神社）

かれた一帯、三原山、八丈富士が望める。祭日は旧二月初午で、東六里の人々が祭る。檜立自治会」とある。八幡神社と当社の勧請時期差は不明だが、奉斎集団の地区が異なるために参道が分けられているようだ。

興味深いのは、中央基壇の四隅に大小の先の尖った柱状石が立てられ（通番 131）、基壇裏手の壁際左右の隅にも同様の尖石が立て掛けられていることである（通番 132・133）。基壇手前の3本（左手が2本）に比べると、奥の二本は半分程度の長さで、壁際の石はさらに短い。壁際の石は背後の断崖上のイシバのものかもしれない。

No. 30 八幡山路傍のイシバ①（図版19；通番 134・135）

八幡宮の参道入り口から道なりに、北東へ180mほど進んだ路傍左手斜面に位置する。詳細は不明でトーゲサマの一種と思われるが、基壇状に組まれた石垣上にセメント板製の石室が置かれ、中にずんぐりとした三角錐状の尖石が複数納められている。また、水の入ったペットボトルも供えられている。

No. 31 八幡山路傍のイシバ②（図版19；通番 136・137）

No. 30から道なりに北へ160mほど進んだ左手路傍に集石がある。これもトーゲサマの一種であろうか。上段と下段に分けられる（通番 136）。下段には尖った石や板石が積み重ねられ（通番 137）、写真図版では見にくいだが、上段には同様の石が立てられている。上段の集石は木の根に覆われており、それらが落ちたものが下段に集められているように見えるが、確かではない。

No. 32 諏訪神社（図版19；通番 138～141）

乙千代ヶ浜海水浴場へと降りる急カーブの手前に位置する。巨礫で囲われた敷地内に、さらに板状立石で「コ」の字状に囲った石垣内に、2基の石祠が祀られている。『八丈實記』（第二十五巻）によれば、「古代ヨリ鎮座」し、2基の石祠は「諏訪社」と降雨の験がある「八大竜王社」であるという（近藤 1970）。諏訪社にあたる石祠に「嘉永六年六月十五日建之」の刻銘があるらしいが、未確認である。板石は乙千代ヶ浜から運んだものであろう。

No. 33 乙千代ヶ浜（図版20；通番 142・143）

檜立地区の南岸に位置し、浜といっても八幡山の噴火で形成された安山岩質の板状節理の岩浜であり、丸石は見あたらない。道六神（No. 26）で触れたとおり、ここの板石や尖石が御神体としてイシバに運ばれている。乙千代ヶ浜の由来は、民話「おっちょが浜のいわれ」に次のような話がある（浅沼 1965）。昔、檜立向里のはずれに若い頃に奉公先で盗人の濡れ衣を着せられ、雇い手がなくなったお千代という中年女性が住んでいた。しかし、困窮極まって本当に食料を盗むようになり、村人たちから「殺してしまえ」と追われる。お千代は南の海岸で覚悟を決めて海に飛び込み、「この島が二度とたてないように神様においのりをするぞ」と大声をあげながら、「オキノチチ」（沖にある岩）を目指して泳ぐ。逆に村人たちは「海神さま」にお千代がオキノチチに上がって祈れないように祈ると、お千代が波に吞まれておぼれ死んでしまう。これに因んだ「お千代が浜」がなまって「おっちょが浜」と呼ばれるようになった、というものである。この海岸の岩が神として島民に認識されていたことが窺える。故に、この浜の岩が御神体としてイシバに祀られるのであろう。（石井）

（4）中之郷地区

No. 34 個人邸内イシバ（図版20；通番 144・145）

『伊豆諸島を知る事典』にも紹介されているが、個人宅であるので詳細位置の記述は控える。敷地内の小高いこんもりとした林の中に築かれたイシバである。板状・三角錐状・角錐状の尖石や楕円状丸石が、花卉のように並べ立てられた馬蹄形状の列石である（通番 144）。イシバ中心の奥手に板石で組まれた小石室があり、手前に3本の御幣が立てられる（通番 145）。

御亭主の話では、いつの頃から祀られているか伝わっていないが、先祖代々守ってきているものであるという。昔は、近所に同様の「イシバサマ」がたくさんあったが、末吉地区の民俗調査報告と同様に、かつて各戸に祀られていたイシバサマの多くが、さまざまな理由によって個人で祀り続けることが困難となり、三島神社（No. 35）に移されたという（同神社には無数のイシバが境内に群集している）。また、近所ではイシバの移設とともに屋敷内の林の木々を伐ってしまったがために台風の被害があるが、ウチはイシバの林が台風の防風林として家を護っ

てくれているので、昔の人の言うことは聞くものだと話されていた。

№ 35 三島神社 (図版20・21; 通番 146~157)

桧立方面から来ると、都道215号線の「長楽寺」バス停を右折(南下)し、突き当たりを右に入る。長楽寺を通過して読売新聞八丈島通信部の手前を左に入り、途中右手にある鳥居(③の最上段のイシバ)を通過して150mほど坂を下った右手に社殿が見える。南南東を向く社殿を囲うような3段の各段丘面にイシバが点在している。

掘削された最下段の敷地に社殿が建てられている(通番 146)。大山祇命を祀るとされる社殿は2段の「コ」の字状玉石垣で囲われ、社殿背後に八丈町郷土資料指定の石祠が1基祀られている(天保11(1840)年作)。また、社殿右手の玉石垣際、コンクリート製基壇上に石組(角柱・尖石・板石・楕円形石)が3基ある(通番 146中央)。

イシバが群集しているのは、社殿の右手や裏手の各段丘上であり、4地点に分けられる(以下、①~④に分けて記述)。①:図版146で見ると、社殿右手の一段高い段丘上に鳥居が立っているが、この奥に位置している(通番 147~149)。ここには低い玉石垣に囲われるようにして複数の石祠が祀られているが、最も大きい中央石祠の裏手に生える樹の根元には、樹を囲うようにして板石・尖石・丸石が集積されている。

②:前者と同じ段丘面を、無舗装の小路に沿って進むと鳥居が現われる。その先のちょうど社殿背後に当たる段丘上の道の両側に、イシバが密集して築かれている(通番 150~154)。小路左手(社殿の真後ろ)には、大小の板状石・尖石・柱状石の立石で外周を囲われた正方形の整地された区画内に、大小の石祠が内周するイシバがある(通番 150~152; 小石祠刻銘は未確認)。この方形区画イシバの右手(小路の右手側)や方形区画の裏手奥に、小石祠・丸石・板石・尖石・溶岩が集積されたイシバ群が複数ある(通番 153・154; 小石祠刻銘は未確認)。

③:①②のイシバのさらに1段上の段丘面に築かれている。道路に面して鳥居が立っているが、玉石敷の参道の突き当たりに、低い円形状の玉石垣で囲われた、空間があり、その中心に石祠が祀られている(通番 155; 基壇は玉石で築かれた正方形で、向きは②の方形区画イシバとほぼ同方位)。石祠の真後ろや左右をはじめ、玉石垣際の要所に尖石が立てられている(通番 156; 立石は玉石垣の出入口左右のものを除くと、7カ所に立てられている)。

④:②③のさらに奥の一角に(②の脇道を奥へ抜ける)、社殿とほぼ同方向を向く木札の納められた石祠が祀られている地点がある(通番 157)。玉石階段の上の敷地は、低い玉石垣で正方形に区画されている。

№ 36 水神様 (図版省略)

都道215号線沿いにある八丈町役場中之郷出張所の西傍に「太洋館前」バス停がある。そのすぐ西の沖山商店手前を左に入り、300mほど坂を南下し、角谷商店の角を右へ入るとすぐの突き当たりを右へ入る。そこから南に100mほど下ると右折しかできないため、そのまま右へ道なりに進んだ突き当たりの右手路傍にある。目の前に水路が流れているが、コンクリートで根元を固められた小さな三角錐状の尖石が祀られている。

№ 37 為朝神社 [別称・オオビサマ] (図版22; 通番 158~165)

あんかわ
安川と三原川の合流地点に露天の裏見ヶ滝温泉がある。その上段道路対面の裏見ヶ滝入口(案内板)から三原川沿いに数十メートル登っていくと、右手の急坂に鳥居が現れる(通番 158)。玉石段の急坂を登りつめると、玉石垣のイシバにたどり着く(通番 159)。玉石垣の最奥部、石祠が祀られる中央基壇の手前に方形の一角が設けられており(通番 159左)、そこに尖石が二本立っている。その対面にも同様の区画が設けられていたようだが、玉石垣の残骸が残るのみとなっている。玉石垣の最奥部には、玉石で築かれた基壇上の中央に石祠(天保11(1840)年、流入石工仙次郎作)、左右に小石祠(刻銘:左手「為朝大明神」・右手「口水口清神様」?)・板石・尖石・卵形石が立ち並ぶ(通番 160)。

ところで、中央石祠の真後ろ、玉石垣の段上に二股の樹が生えている。桧立の八幡宮(No. 29)と同様に、その根元に小丸石・尖石・板石・角礫等で構成されるイシバがある(通番 161)。さらに、この樹の裏手には、50メートルほどであろうか細い尾根道が続いており、その両脇と尾根の突端に、前者同様に自然石のみで構成されるイシバが4つ点在している(通番 162~165)。

No. 38 太神宮【別称・護神】(図版23; 通番 166~169)

No. 37の裏見ヶ滝入口を背にして、左へ道路のカーブを進み、安川を渡った左手に安川上流に向う農道がある。これを150mほど北上した右手の山へと入る無舗装の小路が参道入口で、途中から玉石敷の参道となる(通番 166・167)。急坂を登りきると、山頂に逆「U」字状の玉石垣で囲われた玉石敷の敷地中央に、石祠が祀られている(通番 168)。石祠手前左右に尖石の立石があり、石祠の右奥に「大神宮様」刻銘の小石祠が祀られている。その背後は、玉石立石で敷居状に区切られた空間となっており(通番 169)、小丸石が敷かれ、複数の尖石が立てられている。最奥部の立石手前には一枚の板石が祭壇状に置かれ、その上に割れた板ガラスが奉納されていた。

(石井)

(5) 末吉地区

当地区については、東京都教育庁社会教育部文化課(1981)による『八丈島末吉地区文化財調査報告』(以下、『末吉調査報告』)が刊行されているが、千葉徳爾が班長を務めた民俗調査班によって作製された集落内の聖地分布図(同掲書; 図-3)が掲載されており、これを基に分布調査に当たった。短期間の調査では同定し得ない地点も多かったが、以下に、本調査で確認し得たイシバの概要を列記する。

No. 39 稲荷大明神(図版23; 通番 170~173)

中之郷から都道215号線を末吉へ向けて進み、末吉の角尻川を越えて130mほど進んだ山へと入る道を左折(「神子尾」バス停の90m手前)し、農道を130mほど進むと右手に「稲荷大明神」と記された鳥居が現れる(通番 170)。石段の急坂を登りきると、山裾の斜面地を利用した狭い敷地内にイシバが形成されている(山頂ではない)。山の斜面に尖石と板石で組まれた石室、その左手に2基の小石祠と三角錐状の尖石が立てられている(通番 171・172)。石室内には、尖石と板石組みの小石室が入れ子状に祀られ、その左手に尖石が立てられ、2基のお稲荷さまの狐像と複数の酒瓶が納められている(通番 173)。

No. 40 ミナトの神【別称・沖ノ明神】(図版24; 通番 174~177)

八丈島漁協末吉支所の東側にある階段を登った、洞輪沢港を見下ろす高台に位置する(通番 174・177)。階段を登りきると、正面に巨岩が立ちはだかり、その手前に玉石で区画された基壇が築かれ、数基の小石祠(刻銘未確認)と板状石や尖石が祀られている。『末吉調査報告』の北見俊夫の記述では「ミナトの神」とされるが(北見 1981)、同書の千葉徳爾「(4) 集落の聖地」に添付される「図-3 聖地」では「沖ノ明神」と記載されている(千葉 1981)。

No. 41 オオタンチョウ【別称・金比羅様(?)】(図版24; 通番 178~181)

洞輪沢港から末吉の集落へ向かう都道汐間洞輪沢港線の急カーブを曲がりきった角、道路脇の階段を登った高台に位置する(通番 178)。鳥居はなく名称も不詳であるが、『末吉調査報告』「図-3 聖地」には、同地点に「金毘羅様」と「オオタンチョウ」が併記される(千葉 1981)。同書の北見俊夫(1981)の記述では「オオタンチョウ」は「オータンチョーの神様(太田大南神社)」と記述され「沖の明神」とも呼ばれるとするが、金毘羅様との関係性については触れられていない(「太田大南神社」の名称は、『八丈實記』第二十五巻「末吉村社地取調帳」(近藤 1970)に「字橋詰」にある神社名である)。また、『末吉調査報告』掲載の「写真5. オータンチョーの入口(字橋詰)」の写真図版は(北見 1981)、道路が整備された現在とは異なる風景が映しだされているため同定もできないが、位置関係から同一のものと思われる。ちなみに、同報告の千葉徳爾作製と思われる「第1図 末吉村の小地名」では、この場所は「太田ノチョウ」と記される(東京都教育庁社会教育部文化課編 1981)。

洞輪沢港の「ミナトの神」(No. 40)と同様に巨岩があるが、こちらの岩陰の左右に2カ所分けられる。どちらも板石等による基壇が築かれ、小石祠や尖石・柱状石・板状石が祀られている。石祠は左手の基壇に2基(1基は正面無刻銘・1基は未確認)、コンクリートで護岸された右手奥の岩陰に1基(正面無刻銘)ある。

No. 42 八幡様(図版25; 通番 182~189)【採集遺物: 図12-2~9、表1】

No. 42~46については詳細地点を図8に示す。町立末吉小学校の対面、橋の手前にある町役場末吉出張所の角に

ある芦川沿いの小路を右折して入っていくと、右手に舌状丘陵が道沿いに続く。80mほど進むと三叉路に行き当たるが、その角に丘陵へと登る崩落しかけた石段が築かれており（通番 182）、その切り立つ断崖状の急坂を登りきった高台の奥に位置する（図 8、図版通番 183）。

小高い山頂部に玉石敷の平地があり、最奥部にイシバが築かれており（通番 184）、その先は断崖となる。イシバは中央に配置された小石祠（刻銘未確認）と、列石で敷居状に区切られた手前側と奥手側とに分けられる。写真図版（通番 184）では見にくいですが、手前側の左右に門柱のようにイシバが築かれている。左手には玉石が塚状に積み上げられ、尖石が数本立てられている。右手には板状石・尖石の立石群がある。

奥手側のイシバには、中央に丸石が塚状に積み上げられており（通番 185）、その玉石塚の左右に板石・尖石の立石群がある（通番 186・187）。また、図版188・189は同一のものだが、この一枚岩と玉石

塚は、イシバが築かれている平地の手前斜面の左手にある。表採遺物（図12-2～9、表1）は奥の平地上のイシバではなく、この斜面集石のさらに手前の斜面地の断崖際両サイドで採集した。

№ 43 金山様（図版26；通番190～193）

八幡様の三叉路の中央の道を数十m東へ直進すると、右手に斜面を登る小路がある（図8）。これを登って行くと丘陵の尾根部に出るので、道なりに「V」字状に折り返し、低い玉石垣の参道を進むと、背後が断崖となる最奥部にイシバが築かれている（通番 190・191）。

イシバはやや大ぶりの玉石垣で「コ」の字状に囲われ、石垣左右には門柱のように立てられた立石群がある。右手の立石群は尖石だが、左手の立石群は窪みだらけの尖った溶岩で、見るからに奇岩である。玉石垣内には手前左手に朱塗りの石祠が1基、奥の中央に無刻銘の石祠、その左手前に小石宮（刻銘「金山様」）、右手に朱塗りの金鳥居が奉納された石祠（刻銘「金山様」）が祀られ、それらの脇には板状や三角錐状の尖石の立石、球状の丸石も祀られている【『末吉調査報告』聖地地図には「金山様」と記載（東京都教育庁社会教育部文化課編 1981）】。

№ 44 金山様・諏訪様・出雲様（図版26；通番 194～197）

金山様から降りて、元の道をさらに東へ進むと、右手斜面に折り返す石畳の細い参道が現れる（図8、図版通番 194）。これを進んだ突き当たりに、丸石や角礫の石垣で「コ」の字状に囲われたイシバが築かれている（通番 195）。中央に整形された板石と屋根形の加工石で組まれた石室があり、手前に小丸石が敷かれ、両脇に2本の溶岩の奇岩が立てられている（通番 196）。石室内には手前に小石祠（刻銘「金山神社」）、内奥に尖った三角形の溶岩が納められている。『末吉調査報告』地図には「金山様・諏訪様・出雲様」（東京都教育庁社会教育部文化課 1981）と列記されているが、石祠に確認できたのは「金山神社」のみである。石室の背後には石垣に立て掛けられるようにして、大小の尖石（溶岩もある）が並列して祀られている（通番 197）。

№ 45 三島神社（図版27；通番 198～203）

八丈町役場末吉出張所から芦川橋を渡って間もなく、右手に末吉郵便局があり、そのはす向かいの角地に位置する（図8、図版通番 198）。階段を上ると正面に拝殿があるが（通番 199）、その左手に石垣のような細長い積石が築かれており（通番 200）、その中央に尖石の立石群がある（通番 201）。

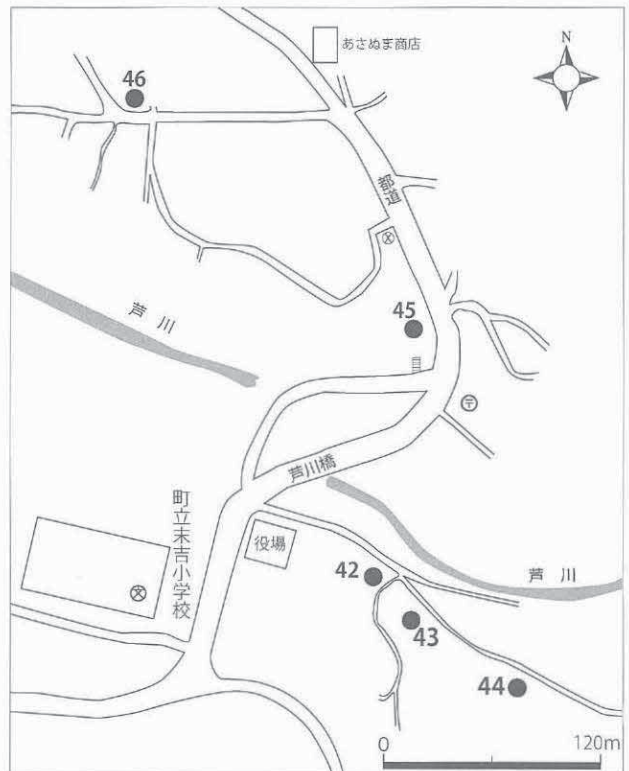


図8 八丈島末吉地区イシバ No. 42～46 詳細地点

また、拝殿奥の本殿両脇には、コンクリート壁を背にしたイシバがある。本殿左脇には、尖石の立石群と本殿に近い位置に八基の石祠群（刻銘に「□玉様／木玉様」「天宮様／奉納」等があるが、他は無刻銘か未確認）とがあるが、写真図版には立石群のみ掲載した（通番 202）。本殿右脇には左脇と同様に、本殿から遠い位置に立石が集められ、大小の石祠が整然と並べられている（通番 203）。最も大きい石祠には「住吉神社」の刻銘があり、その他の小石祠には「稲荷様」「金山様」「木玉様」「石場様」「金毘羅大明神」「住吉様」等の刻銘が見られるが、未確認のものも多数ある。近隣各戸に祀られていたものが移されて集められたものである。

『伊豆諸島文化財総合調査報告』によれば、当社は「勧請由来不詳。菊池武敏氏（末吉宮ケ路。三島神社々掌の子）の話によれば、代官長戸路十兵衛が下田の三島神社の神体をもってきたものとのこと。神体に『江戸鑄工西村和泉守作、延享五年戊辰正月吉日』の銘がある」とされる（田村・金山 1960）。

No. 46 薬師堂（図版27；通番 204・205）

三島神社から都道215号線を150mほど北上し、あさぬま商店末吉店の手前を左折、120mほど直進するとY字路に出るが、その右手前の畑に位置する（図8、図版通番 204）。最近整備され直された石祠があるが、その背面に板石が立てられている（通番 205）。（石井）

第2節 青ヶ島のイシバ

（1）休戸郷地区

No. 1 神子の浦（図版28；通番 206～209）

島北端に位置する丸石の浜である（通番 206・207）。「神子の横原展望広場」の左脇から浜へと降りて行く急坂がある。道のりの途中、崩落のため断崖絶壁に近い状態となっているが、アルミ製の階段梯子が急坂に渡されているためどうにかたどり着ける。往時は船着き場として使われていたが、昭和46年頃に南西の三宝港（青ヶ島港）が整備され、そちらに定期船の就航が移ったこと、昭和47年頃から神子の浦の上の断崖が崩落し、急坂が途絶したこともあって急速に廃れたらしい（菅田 1984）。かつては牛を引いて坂の神子道を登っていたとの話も現地で聞いた。また、神子の浦に鎮座していた神としては、『八丈實記』第二十五巻には「ミコノハマ 一、宝神社 石場 社地 長二間 幅一間半 村持／一、ウバ神社」（近藤 1970「青ヶ島神社明細」）とある。「宝神社」「ウバ神社」以外にも浜には数カ所、浜へ降りる急坂の途中にも7ヶ所のイシバがあったようだが、上記の原因により廃れたらしい（菅田 1984）。また、1958年調査時には、神子の浦の上に「カツオイシバサマ」もあったという（坪井 1975a）。しかし、現在確認できるのは、浜に面した断崖に1カ所（No. 2）、坂道に1カ所（No. 3）のみであった。なお、浜の沖に「神子様」と呼ばれる尖った岩が海中から突き出ている（通番 208・209）。

No. 2 神子の浦断崖のイシバ [名称不詳]（図版28；通番 210・211）

浜へと降り立つ直前の坂道にあり（通番 210）、断崖



図9 青ヶ島のイシバ分布地点

に種々の石が埋めこまれるようにして築かれたイシバである。坂道のすぐ先は大きな崖崩れで道が失われている。丸石と板石が組まれた小石室、尖石の立石、2基の小石祠で構成される。かつて浜にあったとされるイシバの内、崖崩れの難を逃れたのは、見た限りではこのイシバだけのようなのである。

No. 3 八天狗様 (図版28; 通番 212・213)

浜へ向う急峻な坂の路傍に位置する。周囲から突き出るような巨岩の岩陰にイシバが築かれている。大鳥居には「八天狗様」の銘がある(通番 212)。岩陰下に、下部に板石と玉石が積まれた基壇が築かれ、その上に溶岩と板石で組まれた小石室と石祠が祀られ(通番 213)、赤い溶岩がごろごろと転がっている。

No. 4 清受寺 (図版29; 通番 214~217)

北東海岸沿いの道を交番から南東へ400mほど進んだ右手にある。八丈島大賀郷の崇福寺の末寺であるという(菅田 1984)。境内片隅に玉石の基壇が築かれ、その上に、卒塔婆とともに2本の尖った溶岩の立石がある。詳細は不明。

No. 5 槍ノ坂付近路傍のイシバ (図版29; 通番 218・219)

清受寺から南東へ道なりに進み、槍ノ坂への入口を過ぎた急カーブの海側斜面に位置する。護岸壁を正方形にくり抜いた中に尖石が4つ祀られている。槍ノ坂付近に位置することから、炭焼きの神を祀ったとされる「スミヨシサマ」(住吉=炭良)の可能性が高いが、詳細は不明である。1984年の時点では、この付近の「スミヨシサマ」には「立石はなく、大里神社の下石場の左奥に鎮座されている」という(菅田 1984)。セメントの風化度合いからして、近年、新たに祀られたもののようである。

No. 6 大里神社 [別称・丈鬼神社、オートリ神社] 「下のイシバ」 (図10、図版30; 通番 220~227)

清受寺の先の右手に外輪山へと入る小路がある。これを道なりに進むと一の鳥居が立っている(通番 220)。ここから80mほどの玉石段を登りきると「下のイシバ」があり、さらに参道を登った山頂に「上のイシバ」が築かれている。1958年調査時の坪井洋文撮影と思われる写真では、イシバは苔生しているが、現在は石祠の多くが露わになっている(蒲生・坪井・村武 1975)。『八丈實記』第二十五巻には「一、セウキ神社 社方二間 祭十一月中ノ酉日 村持ノ三嶋神社 社地三間二間半 祭十一月中ノ酉日 村持ノウハ神社 同ノ辰巳嶋神社 神体宝物 筭二似タル石銅ノカタマリ 同ノ木魂神社 同」とあり(近藤 1970「青ヶ嶋神社明細」)、また当社は「今七社明神ト云ノ青ヶ島ノ総鎮守ナリ祭神ハ梵天帝釈ト其原始ヲ詳ニセス、神号ヲ丈鬼ト書、又仮字ニセウキトモ認ム、今ハ鐘鬼ト記ス、(後略)」という(近藤 1969)。

かつては、11月25日に「トリの祭り」、「デーラホンの祭り」(上のイシバ)、「オートリサマの祭り」「エンダンの祭り」(下のイシバ)等の行事が行われていたが、中止となって久しい(谷口 1987)。また、坪井洋文(1975b)の報告によると、イシバに祀られる自然石は「カミソーデ」と呼ばれる巫女になるための試験を終えた巫女が、自分の守り神である「オボシナサマ」としてイシバに献じたものであるらしい。下記に、様々な神名が出てくるのは、巫女や舎人の個々の「オボシナサマ」であるとされる。

さて、「下のイシバ」はチョウヤ(社殿ないしは籠り屋)の裏手の段丘上に築かれている(図10-①④、図版通番221~226)。玉石で築かれた基壇に大小の石祠、板石組の石室、玉石・尖石・板石の立石、タケノコ様の石(「タツミシマジンジャ」; 蒲生・坪井・村武 1975)が祀られている。イシバ前庭の南角に、コンクリートで正方形に組まれた囲いの中に、玉石と御幣が立っている(通番 227)。石祠の刻銘については未確認のものが多いものの、大ぶりの石祠正面にはほとんど刻銘がなく、小石祠の刻銘に「大木玉様」「木玉様」「七社明神」等がある。

1958年の民俗調査では、おそらく、聞き取りによって石祠の祭神が比定されているが、現況の石祠数と相違があり、石祠の位置も入れ替わっているようで、我々の調査では現地での聞き取りを行っておらず、刻銘を詳細に調査していないため同定は困難である。1958年民俗調査当時の「下のイシバ」の祭神を列挙すると、左の石祠から「リュウグウサマ」「タツミシマジンジャ」「オミシマサマ」「ショウキシチザノミョウジン」「オーキダマサマ(シタノイシバの主神)」「ウバイノミョウジン」「タカラノミョウジン(女の神)」「オオクニヌシノミコト」「アメノミナカヌシノカミ」「タカミムスビノカミ」「カムムスビノカミ」であるという(図10-②、蒲生・坪井・村武 1975)。

また、菅田正昭（1984）の調査報告によれば、下のイシバの祭神は「大木玉様」「ウバイ・宝明神」「七首明神（為朝が連れてきた7人）」「縁談神（えんだん祀りの神で、大国主命）」「一般石場（天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の造化三神）」「三島様」「鼠神様（昔、青ヶ島にネズミが大繁殖し、大きな害をもたらしたとき、それを封じ込めるために建てた）」「水神様」「金山様」「辰巳島明神」「海神様（竜宮様ともいわれる）」「流坂天狗・槍ノ坂天狗・住吉様」「トウショウジガミ（下のイシバの庭の片隅に、御幣を立てた痕跡）」であるという。

№ 7 大里神社【別称・丈鬼神社、オートリ神社】「上のイシバ」（図10、図版31；通番 228～235）

「下のイシバ」の左脇から斜めの方向に玉石階段の参道を登る（図10-①；参道方向は実態とは異なる）と、山頂に鳥居列が現れ（通番 228・229；尖石の立石もある）、その奥にイシバが築かれている。前列に「下のイシバ」と同様の玉石基壇が築かれ、その上に大小の石祠や石室、立石が立ち並ぶ（通番 229～231）。このイシバの背面にも小石祠が数基祀られている（通番 232）。さらに奥の後列の基壇はやや崩壊していて、玉石の積石み状になっているが、ここにも数基の石祠が祀られている（通番 233・234）。さらに奥手に玉石集石や石祠も数基ある（図10-①）。石祠の刻銘は未確認のものが多く、図10-①には写真から判別できた「八天狗様」のみ記載した。なお、鳥居と前列イシバの間の左手から池之沢地区の丸山が見通せる（通番 235）。

1958年民俗調査の見取り図（図10-②）と比較すると、だいぶ現況は変わっているようである。「下のイシバ」と同様、石祠の祭神を同定することはできないが、1958年調査時の「上のイシバ」の祭神を列挙すると、「オオナムチノミコト」「ハヤマハツテングウ」「広江治兵衛の守護神」「日天月天」「テンニハヤムサ」「ボンデンオン」「九曜星」「キツネオサガミ」「キダマノテンジン」「ヤクシ」である（図10-②、蒲生・坪井・村武 1975）。

また、菅田正昭（1984）の報告によれば、おそらく前列のイシバの祭神に相当すると思われるが「新神様【大己貴神（オオナムチ）のことであるという】」「八天狗【ハヤマハチテング（葉山八天狗。早山八天狗）のことであり、ハヤムサと同神と考えられている】」「ベットーオボシナ（広江次平さんの家の守護神という）」「日天・月天」「凡天王（ボンテンオー）」「七曜・九曜【北斗七星・スバリ（スバル星）】」「オサ神（キツネオサガミともいう）」「酒王様」「木玉天狗」「ヤワタ若宮」「ヤクシ様」「渡海様」「テンニハヤムサ様」が祀られ、その裏手（前列イシバ背面のことか、後列のイシバか不明）に個人奉納の祠が9基あり、それらの内、祭神の刻銘がるものは「天野早正神様」「天ニ早房宮」「八天狗様」であるという。（石井）

（2）西郷地区

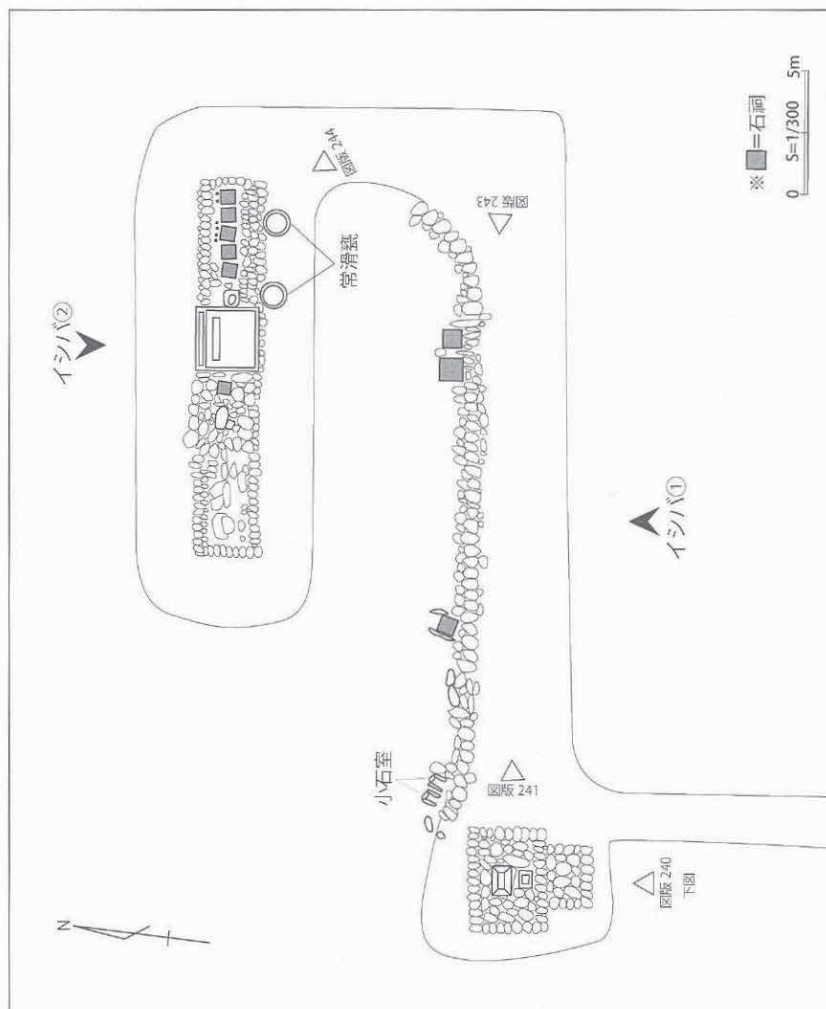
№ 8 金毘羅神社（図11、図版32・33；通番 236～247）

島北端の小高い丘陵に位置する（通番 236・247）。ヘリポートを突き抜け、道なりに直進していくと一の鳥居に行き当たる（通番 237）。丘陵の裾を西へと直進する玉石敷の参道の突き当たりに二の鳥居が立ち、その奥の掘削地に石垣で囲われたコンクリートの社殿が建っている（通番 238）。社殿内には「金毘羅宮」「天照皇太神宮」「春日大明神」「三嶋神社」「須賀神社」が合祀されているが、『八丈實記』第二十五巻では「テウノトンプ／一、金刀毘羅神社 社方一間 地方九尺 祭十月十日 村持／地役人 高 為全 名主 佐 伊信 船頭 岩松 合三社／整 二十カ所」とある（近藤 1970「青ヶ島神社明細」）。『青ヶ島の生活と文化』では「金毘羅宮以外は正末期から昭和初年にかけて、向里の奥山神主家の屋敷内から遷座・合祀された」という（菅田 1982）。

そもその由来は「天明年間の大噴火によって無人化した青ヶ島を開発するため、避難先の八丈島から帰島する際の渡海の安全を、船頭岩松が祈願したところ、数十年の間一度も事故がなかったことから、その神恩に感じて金毘羅大権現を勧請した」のが始まりであるとされる（菅田 1984）。

社殿の右手、石垣の上段にイシバが確認できる（通番 239）。玉石が一定範囲に敷かれ、その上に左から小石祠二基（刻銘があるが判読不能）、玉石の立石、板石（刻銘「金毘羅宮」）が並んで祀られている。これを「ツイジロウミヤ（忠次郎宮）」と呼ぶ人もいるという（菅田 1984）。

こことは別地点の丘陵上に、明治初年の時点で20基以上の祠があったという（菅田 1984）、イシバが築かれている（図11）。社殿から参道へ引き返すと、左手に丘陵を登る小路があり、これを突き進むと、角礫や玉石が積み

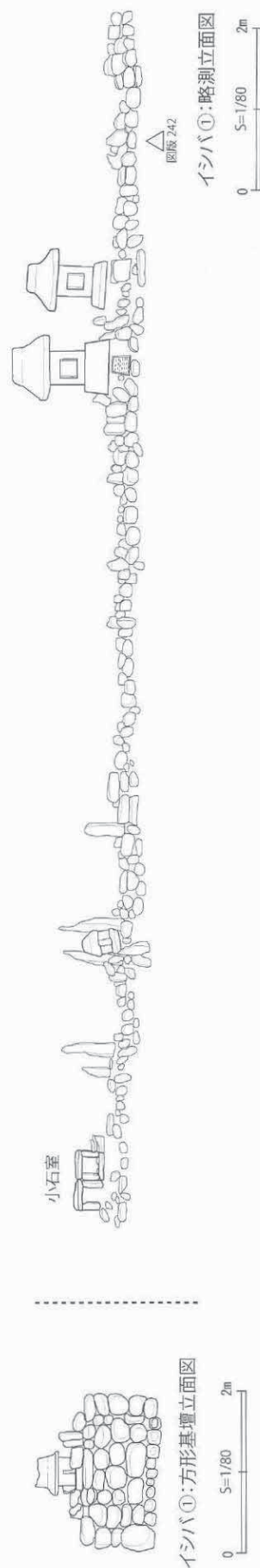


刻銘「南無妙法蓮華經八大龍王神」

刻銘「龍王神」

イシバ②: 略測立面図

0 5=1/80 2m



イシバ①: 方形基壇立面図

0 5=1/80 2m

イシバ①: 略測立面図

0 5=1/80 2m

図 11 青ヶ島西郷地区金毘羅神社境内イシバ略測概念図

れた方形基壇上に石祠が祀られたイシバに行き当たる（通番 240）。ここから東へ続く小路に沿って列状にイシバが築かれている（図11・イシバ①、図版通番 241～243）。玉石や板状石・尖石の立石群、複数の石祠各々に御幣が立てられている。

さらに、この裏手の海側には、玉石で築かれた基壇が築かれ、その上に石祠や石碑、立石が祀られている（図11・イシバ②、図版通番 244～246）。中央付近のコンクリート基壇の石碑は昭和九年に建てられたもので、表面に「南無妙法蓮華經 八大龍王神」、その左手下の玉石には「龍王神」の刻銘が見られる。当イシバから北方の海が一望できるが、図版33-247は北側丘陵麓から海側のイシバを見上げた遠景である。

№ 9 渡海神社（図版33；通番248～251）

発電所と郵便局近辺の個人宅へ入る脇道を通り、しばらく進むと一の鳥居が現れる。玉石敷きの参道を登り詰めると、正面の高台に二の鳥居があり、その奥に「上のイシバ」が築かれている（通番 248・249）。イシバは「上のイシバ」と「下のイシバ」に分かれる。「下のイシバ」が大元の「トカイサマ」であるらしい（菅田 1984）。「上のイシバ」は昭和51年に何者かによる破壊を受け、復元再建されたものらしいが（菅田 1984）、玉石で築かれた基壇上に玉石の立石や大小の石祠（刻銘「渡海神社」）、板石を積み上げたもの、小金鳥居が納められたコンクリートの石室などが祀られている。「下のイシバ」は「上のイシバ」を背にして少し参道を下った左手に小路があり、道の先に鳥居が立っているのが見えるが、その斜面沿いに板石や玉石で組まれた小石室や尖石の立石が並んでいる（通番 250・251）。夏季調査ということもあり、下草に遮られ詳細は確認できなかった。

№ 10 東台所神社（図版34；通番 252～259）

青ヶ島郵便局から南へ200mほど進むとY字路に出る。左手の細い道を400mほど直進すると、右手に大凸部へ向う道、左手に神社へ向う分岐点に突き当たる。左手の小路を進んでいくと、一の鳥居に行き当たる（通番 252）。ここから急斜面に築かれた玉石階段を登りつめると、頂上に朱塗りの社殿が建っている（通番 253・254；社殿入口左下に1基の小石祠・刻銘「天之早武者／新神／乙名神」）。『八丈實記』第二十五巻には「大里ウハ石場開発後／一、新神 村持／社石場 社地 方一間 祭十一月廿五日」とある（近藤 1970「青ヶ島神社明細」）。また、1757年に乱心して11人を殺傷し、入水自殺した青ヶ島名主の倅・浅之助の霊（新神＝ハヤムサ）を祭神として祀っているらしいが、民話では浅之助の恋人おつなが祀られることで新神が縁結びの神となったであるとか、あるいはオオナムチとの説もある（菅田 1984）。

イシバは社殿左手の玉石垣上にある（通番 255～257）。多数の小石祠や玉石の立石、板石組みの小石室、塩ビ管製の小鳥居が祀られている。未確認のものも多いが、小石祠の刻銘は「八天宮」「天ニハヤ／ムシヤ様」「天野早耳者様」「天ニ早ムサ／新神様／オツナ神様／渡海神社」「新神産土様」等がある。社殿正面には外輪山の尾根上にある尾山展望公園へ抜ける別の参道があり、それを進んで尾根から見ると当社が山頂にあることが分かる（通番 259）。

№ 11・12 上手ノ原路傍のイシバ①・②【名称不詳】（図版35；通番 260～263）

三宝港（青ヶ島港）へ向う道路の途中、大凸部の西麓に当たる路傍に位置する。どちらも道路に面した山側の護岸壁をくり抜いた石室である。①は正方形の室内に一本の尖石が祀られている（通番 260・261）。②は道路から階段が設けられ、壁が石祠形にくり抜かれた中に板石、その手前に小石祠（刻銘未確認）と丸石が祀られている（通番 262・263）。「大凸部、西ヶ峠の外輪山には、トーゲサマと思われるものが4～5カ所ある」（菅田 1984）というので、道のカミであるトーゲサマの可能性はあるが、詳細は不明である。（石井）

（3）池之沢地区

№ 13 シオガマサマ（塩釜様）（図版35；通番 264・265）

三宝港の岬の突端に位置する。巨岩の下に鳥居が立っているが、海が荒れているため近づけなかった。かつての塩焼き場跡（未確認）が島内に点在するが、そこにはシオガマサマが祀られているとのことであり、この巨岩もシオガマサマと呼ばれているという（菅田 1984）。

No. 14 三宝神社 (図版36; 通番 266~269)

シオガマサマから東へ100mほど坂を登った断崖に位置する。コンクリートで固められた基壇上に板石や尖石、小石祠が立ち並ぶ。石碑の刻銘に「三宝港鎮守大明神」「三宝大明神」「□…□遭難者の碑」とある。

No. 15 富士山神社 [別称・富士様] (図版35; 通番 270・271)

池之沢地区の内輪山・丸山 (標高211m) 頂上付近に位置する。角礫の低い石垣で囲われた区画内に、塚状の玉石と長大な溶岩の尖石が2本、その裏に短小の尖石が1本立てられている。由緒の書かれたプレートには「富士様／昔、島民は火山の噴火を恐れ出産、月事の人、喪中の人などは不浄とし、池之沢に足を踏み入れることが出来なかった。名主佐々木初太郎 (1864~1920年) は限りある労働力を活用する為にこの慣習を改めようと、ここに神社を建てお参りして農作業が出来るように便宜を図った。今はこの風習もすたれたが祭日は1月、5月、9月の各13日で、願をかける人は、海岸の小石を奉納している。東京都青ヶ島村」とある。また、坪井洋文 (1975b) の1958年調査に基づく報告によれば「願掛けのことをシチニンモチ (七人持ち) という。自分に精神的な悩みのあるとき、ミウチの者が料に出て遭難したとき、病人の続くときなどに願掛けを行なう。海岸から石を一個拾ってきて、隣近所や親戚の男女七名で富士山へ行って供える。石は雌石でも雄石でもよい。オレイマイリには一人で行く」という。八丈富士の浅間神社にある願掛け石との共通性が窺える。

(石井)

第5章 考察

八丈島・青ヶ島のイシバに関しては、これまで主として民俗学において調査研究が進められてきたものの、各イシバの形態や祀られている「石」の種類等の「モノ」の情報に乏しく、その実態を把握することが困難であった。第4章序節においても述べたように、本調査では「モノ」の研究と「心」の研究とを結節点するための基盤を築くことを目的として、まずはイシバの実態を把握すべく、その分布地点の測定と写真撮影による視覚情報の収集に努めた。また、本文では『八丈實記』以降の知見に基づきながら、イシバの現状の事実記載に徹し、写真図版に大きくページを割いた。ここでは、事実記載の中でも時折触れている2、3の問題や年代観等について若干の考察を加えることで、今後のイシバ調査研究の布石としたい。

イシバ自然石の採集地

まず、イシバに置かれる自然石の採集地点の問題がある。本調査では、これに関する聞き取り調査を行っておらず、両島における石材の露頭・転石地点の悉皆的踏査も実施していないため、確実なことは言えない。今後の課題として残る問題ではあるが、玉石ないしは丸石は、八丈島の三根地区においては「垂戸」の浜の丸石が聖的なものとして認識されていたようで（川田 1990）、大賀郷地区では『八丈實記』第六巻に「海岸ノ横間ヶ浦ハ丸石、平浜也」との記述があり（近藤 1964「第三編 八丈名義 五村惣評」）、現在でも「横間の浜」から持ってきたと伝わっている（樋口秀司編 2010）。また、住宅地図には三根地区に「丸石」、中之郷地区には「玉石浜」なる地名が見える。これらのことから推察するに、イシバに持ちこまれる玉石・丸石は地区毎に採集地点が定められていたようである。なお、青ヶ島では神子の浦の丸石が採取されていたことは確実であるが、『八丈實記』第四巻には「西浦 丸石」の記述もある（近藤 1964「第四編 見地 地図」）。

板石や尖石については、八丈島檜立地区の乙千代ヶ浜が第一候補として挙げられるが、西山山頂の浅間神社（旧称・富士神社）に置かれた尖石（図版通番 13）は、『八丈實記』に「大賀郷前崎」から運んだものと伝わっているため、丸石と同様に各地区によって採集地点が定められていた可能性がある。

また、八丈・青ヶ島の各地区のイシバや石段には柱状節理の所謂六方石が、かなりの量で散見される。柱状節理の棒状石は縄文時代の大形石棒の石材でもあり、これがどこから運ばれたものかを特定することは、縄文時代の精神文化研究はもとより、イシバの問題を考える上でも非常に重要である。

八丈島の乙千代ヶ浜を一瞥した限りでは、柱状節理露頭は見当たらなかったものの、板状節理と柱状節理は形成過程の性質上、隣接して存在する場合が多く、おそらく、乙千代ヶ浜の近接地点あるいは大賀郷前崎等の島内各地に点在する可能性が高い。他島や柱状節理の露頭がおびただしく観察される伊豆半島から持ち込まれた可能性は否定できないものの、八丈・青ヶ島はもとより、管見では、伊豆諸島では柱状節理露頭の悉皆的調査は行われておらず、今後悉皆的な石材露頭調査が必要となる。ちなみに、大賀郷地区の南原千畳岩海岸は柱状節理ではあるが、径が太すぎ巨大すぎる。

青ヶ島に至っては板状・柱状石の露頭地点を全く特定できていないが、八丈島や他島から持ち込まれたものも少なからずあるとしても、島内に板状・柱状節理の採取地点がある可能性は非常に高い。というのも、『八丈實記』第八巻には、「○ウバ明神 ハマヂカクヒラヨリ大里の社へ子コムシト云フ、女ノ頂ニ棒ク処ノ盤石、長サ七尺有余ノ立石を神体トス」（近藤 1969「第四編 青ヶ島」）と記述があり、古の土器が当時出土していたという島南端に位置する伝承の地「浜路ヶ平」から、大里神社へ運ばれた2mを越える立石があるというから、現在は踏査が困難な地点に板状・柱状節理の露頭が点在すると思われる。

イシバの地理的特質

イシバに祀られる神々の性格によって、神域の地理的傾向には差異があることが予想され、また、祀られた時期については不詳のものが多く、度重なる火山噴火による移設や、近代以降に習合されて原位置を止めていないものも多いことを鑑みると、イシバの占地傾向による分類に格別な意義を見いだすことはあまり期待できない。

そうした問題点を措いて、八丈島・青ヶ島におけるイシバの地理的特質を挙げるとするならば、その多くが

「トンプ」と呼ばれるような平地より突出した高台や断崖の丘陵地、小高い山の山頂付近に築かれていることに特徴がある。それらに該当するのは、八丈島の西山山頂 (No. 1) や東山山頂 (未調査) 以外にも、三根地区の天照皇大神宮 (No. 4)、神止山 (未調査)、大賀郷地区の護神山 (No. 12)、弁天山 (No. 16)、稲荷大明神 (No. 19)、松尾神社 (No. 20)、檜立地区の三島神社 (No. 22)、大神宮 (No. 23)、道六神 (No. 25)、弁天様 (No. 27)、八幡山の八幡宮・稲荷神社 (No. 29)、中之郷の邸内イシバ (No. 34)、三島神社 (No. 35)、為朝神社 (No. 37)、大神宮 (No. 38)、末吉地区の稲荷大明神 (No. 39)、ミナトの神 (No. 40)、オオタンチョウ (No. 41)、八幡様 (No. 42)、金山様 (No. 43)、金山様・諏訪様・出雲様 (No. 44)、三島神社 (No. 45)、薬師堂 (No. 46)、青ヶ島の大里神社 (No. 6・7)、金毘羅神社 (No. 8)、渡海神社 (No. 9)、東台所神社 (No. 10)、富士山神社 (No. 15) 等である。

また、八丈小島の鳥打・宇津木両遺跡 (青木豊・内川隆志・粕谷崇編 1994) のイシバのように、岩塊がせり立つような岩場 (ないしは磐座) に築かれたものも、八丈島の為朝神社 (No. 21)、弁天様 (No. 27)、ミナトの神 (No. 40)、オオタンチョウ (No. 41)、青ヶ島のシオガマサマ (No. 13) 等のように複数認められる。

こうしたイシバの中で特に注目すべきは、社殿を持たない小高い山や丘陵に築かれる事例の内、近世以降に造営された基壇上石祠の背後に、自然石によるイシバを持つものである。例えば、檜立地区八幡山山頂の二社背後にあるイシバ (No. 29、図7、図版通番 126・127)、中之郷地区為朝神社の石祠背後の5地点のイシバ (No. 37、図版通番 161~165)、太神宮の石祠背後にある敷居状列石で区切られたイシバ (No. 38、図版通番 169)、末吉地区八幡様の石祠と敷居状列石で区切られた背後にある集石状のイシバ (No. 42、図版通番 185~187) 等が該当する。これらはイシバの占地の時期的変遷を示しているようで興味深い。

太神宮 (No. 38)・八幡様 (No. 42) の背後イシバは、おそらくは近世に構築された石垣内に取り込まれ、再整備されているものの、石祠の背後に自然石のイシバを遺すという配慮がうかがえる。また、八幡山山頂 (No. 29) と為朝神社 (No. 37) の背後イシバは、基壇や石垣からは隔絶されているが、その切り合い関係を見ると、基壇造営の際に、元々その場にあった背後のイシバに配慮しつつ、新しいイシバを構築していることがうかがえる。あるいは、一部を切り崩したために、その自然石を入口左右に集積させたかもしれないが、こうした状況は時期的な前後関係を示していると捉えてはば間違いないであろう。ちなみに、八幡山山頂の背後イシバは忘れ去られているのか、既に埋没過程に入っている一方で、為朝神社の背後イシバは尾根道が掃き清められていて、未だ信仰の対象となっていることがうかがえた。

石祠・社殿背後の自然石イシバ

八丈島八幡山山頂と為朝神社等の背後にある自然石イシバは、近世以前に遡る可能性を示しているが、元々その場に自然石のイシバが築かれていたか否かも定かではない他の地点においても、①石祠ないしは②社殿の背後に自然石を祀るという傾向が見られる。

①石祠の背後に祀る事例では、西山山頂の浅間神社 (図版通番 12)、大賀郷地区の崇福寺近傍のイシバ (No. 13、図版通番 46・47)、磯神社 (No. 17、図4-1、図版通番62・63)、三島神社 (No. 18、図4-2、図版通番 66)、稲荷大明神 (No. 19、図4-3、図版通番 70・71)、檜立地区の道六神 (No. 25、図版通番 107・108)、中之郷地区の三島神社 (No. 35、図版通番 147~149、155・156)、末吉地区の金山様 (No. 43、図版通番 192)、金山様・諏訪様・出雲様 (No. 44、図版通番 196・197)、薬師堂 (No. 46、図版通番 205) 等が挙げられる。

また、②社殿背後に祀る事例には、檜立地区の三島神社 (No. 22、図5)、不動堂 (No. 24、図版通番100・101)、中之郷地区の三島神社 (No. 35、図版通番146・150) 等が挙げられる。ちなみに、大賀郷地区の護神山は変則的ではあるがコンクリート社殿の背後に石祠が祀られている (No. 12、図版通番 45)。

これらのイシバは、噴火の際に島民が避難したとされる末吉地区を除いて、幾度となくくり返された西山噴火の際に、移築ないしは再造営がなされたであろうことは容易に推測がつく。とすれば、その折々に、その時々の人々によってイシバに改変が加えられているはずなのだが、現状においてもなお、背後に自然石を祀るという行為が行われているということは、先の基壇イシバと自然石イシバの前後関係からしても、自然石によるイシバという古態が、形態を変えながらも人々の記憶や伝承として継承され、「石祠や社殿の背後に自然石を祀る」という

形式を採って、再造営の際にリバイバルされていると捉える事ができるだろう。

また、それ以上に興味深いのは、石祠や社殿背後に自然石を祀るという行為が、南部伊豆諸島のみならず北部伊豆諸島にも見られるという事実である。例えば、新島本村の十三社神社では、本殿のみならず左右の摂社の背後に自然石が祀られており、同様の事例は本村の為朝神社、若郷地区の浜宮神社等にも見られる。

加えて、新島・式根島の社殿をもつ神社では、八丈島のイシバが左右に門柱のような自然石イシバをもつのと同様に、社殿左右に必ずと言って良いほど自然石が祀られており（自然石は末社と言われている）、その類例は三宅島にも複数見られる。また、三宅島の富賀神社の拝殿左右や椎取神社奥宮には、自然立石のイシバが形成されてもいる。八丈・青ヶ島以北の島では、本土に近づくほどイシバの形態は簡素化されているものの、伊豆諸島のイシバの形態的バリエーションを色彩の濃淡で喩えるならば、自然石が主体となるものを古態の濃い色としてみると、北部の新しい淡い色から南部にかけて色が濃くなるようなグラデーション状態が、諸島のイシバの実態としては分かりやすい。

他方、さらに北の伊豆半島では、神社の御神体として柱状節理の棒状石を加工した縄文時代の大形石棒が祀られる事例が数多くある。このことは、現代の石神信仰を考える上でも、あるいは通時的な石信仰の比較研究を行う上でも非常に面白い問題を含んでいる。

伊豆諸島のイシバでは自然石が信仰の対象となる一方で、石祠も同等のものとして扱われている。ところが、柱状節理の露頭が夥しく点在する伊豆半島では、自然石でも石祠でもなく、縄文時代の人工石棒が信仰の主対象となるのはどういった理由からなのだろうか。

これを突き詰めていくと『三宅記』に描かれる三嶋大明神の「石の笏」の問題や（三橋 2011）、伊豆半島の特異な道祖神の形象の問題にも広がっていく。あるいは、甲州・信州を主な分布圏にもつ双体・丸石道祖神と縄文時代の石棒とセット関係等との関連性なども考慮に入れていく必要があるだろう（石井 2012）。

イシバの年代観

さて、本分布調査においては、いくつかの地点において遺物の表面採集を行った（成果詳細は図12及び表1を参照）。古いものでは12世紀に遡るものもあるが、表面採集であるが故に、伝世品が後世に持ちこまれた可能性が高く、ただちにイシバの構築年代に結びつけることはできない。とはいえ、比較的噴火の被害が少ないと思われる末吉地区において中世遺物が採集されたことは、史実と照らし合わせてみても、八丈島のイシバの構築年代が中世にまで遡る可能性は大いにあり得る。

間接的な年代情報としては、八丈島に近接する八丈小島では、鳥打・宇津木地区の自然石を主体とするイシバ発掘調査の結果、中世遺物を含むものの確実には17世紀前半～島民が完全離島する昭和44年までの約370年間で、イシバの継続年数と報告されている（青木豊・内川隆志・粕谷崇編 1994）。また、北部伊豆諸島の利島・堂ノ山神社境内祭祀遺跡（青木豊・内川隆志編 1994a）や阿豆佐和気神社境内祭祀遺跡（青木豊・内川隆志・須藤友章編 2005）のイシバ構築年代は12世紀以降とされている。大島の和泉浜B遺跡（大島和泉浜遺跡調査団編 1991）の積石塚構築年代は14世紀後半から15世紀という。三宅島の物見処遺跡をはじめとする積石塚群の多くも、若干遡るかほぼ同等の年代が与えられており（後藤守一・梅沢重昭 1959、吉田恵二編 1982・1983～2001）、こうしたことから、今回報告した八丈島・青ヶ島のイシバの中には中世に遡る可能性が高いものも含まれていると思われるが、現状では大まかな推察的理解に止まらざるをえない。

（石井・深澤）

引用・参考文献

- 青ヶ島教育委員会・青ヶ島村勢要覧編纂委員会編 1984『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村役場
- 青木豊・内川隆志・粕谷崇編 1994『東京都八丈町 鳥打遺跡・宇津木遺跡調査報告書』八丈町教育委員会
- 青木豊・内川隆志編 1994a『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』利島村教育委員会
- 青木豊・内川隆志編 1994b『御蔵島神ノ尾遺跡』（『國學院大學考古学資料館紀要』第10輯）國學院大學海洋信仰研究会・神ノ尾遺跡学術調査団
- 青木豊・内川隆志・金成南海子編 1999『伊豆利島 八幡神社境内祭祀遺跡』國學院大學考古学資料館
- 青木豊・内川隆志・須藤友章編 2005『阿豆佐和氣命神社境内祭祀遺跡』國學院大學海洋信仰研究会
- 浅沼良次編 1965『八丈島の民話』未来社
- 石井 匠 2011「大形石棒の造形デザイン」『縄文時代の大形石棒—東日本地域の資料集成と基礎研究—：國學院大學研究開発推進機構学術資料館「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」研究報告』國學院大學学術資料館
- 石井 匠 2012「石神—モノと心の古代学」『祭祀儀礼と景観の考古学』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 石原憲治・中村雄三・福地光三郎・伊藤真康1960「IV建築 八丈・小島の民家建築報告」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第3分冊、東京都文化財調査報告8、東京都教育委員会編
- 内川隆志 2008「八丈小島鳥打遺跡の再検討」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第1号、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 大島和泉浜遺跡調査団編 1991『大島和泉浜B遺跡発掘調査報告書』大島和泉浜遺跡調査団・東京都労働経済局
- 大間知篤三 1951『八丈島』創元社
- 大間知篤三 1960『八丈島』増補版、創元社
- 大間知篤三・金山正好・坪井洋文 1966『八丈島』角川文庫2292、角川書店
- 大間知篤三 1971『伊豆諸島の社会と文化』慶友社
- 小川直之 2003「石神と民俗」『日本の石仏』第108号2003年冬（特集民俗学と石仏）、日本石仏協会
- 葛西重雄 1990『八丈島青ヶ島碑文墓誌集成』みずうみ書房
- 蒲生正男・坪井洋文・村武靖一 1975『伊豆諸島——世代・祭祀・村落——』未来社
- 川田牧人 1990「八丈島の信仰・儀礼と『しま』空間」『伊豆七島における島世界の民俗学・文化人類学的研究—空間（海・島・山）と儀礼をめぐる—』平成元年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書（研究代表者 牛島巖 課題番号62410007）
- 北見俊夫 1981「『八丈島民と海』の民俗」『八丈島末吉地区文化財調査報告』東京都教育庁社会教育部文化課
- 郷田（坪井）洋文 1960「B 八丈島の社会と民俗 3. 民間信仰」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第4分冊、東京都文化財調査報告9
- 国土地理院 2006『1:25000地形図 八丈島』
- 国土地理院 2006『1:25000地形図 八丈島南部』
- 国土地理院 2006『1:25000地形図 八丈島小島』
- 後藤守一・梅沢重昭 1959「Ⅲ考古 G三宅島坪田における中世遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第一分冊 東京都文化財調査報告書6、東京都教育委員会
- 近藤富蔵（八丈実記刊行会編纂） 1964『八丈実記』第一巻、緑地社
- 近藤富蔵（八丈実記刊行会編纂） 1969『八丈実記』第二巻、緑地社
- 近藤富蔵（八丈実記刊行会編纂） 1970『八丈実記』第五巻、緑地社
- 近藤富蔵（八丈実記刊行会編纂） 1972『八丈実記』第六巻、緑地社
- 桜井徳太郎 1958「日本における民族信仰の特質—伊豆諸島の屋敷神について—」『日本人類学会 日本民族学協

- 会連合大会』第12回記事、日本人類学会・日本民族学協会（再録：1969「伊豆諸島の屋敷神ー日本民族信仰の一つの特質ー」『宗教と民俗学』民俗民芸双書41、岩崎美術社）
- 菅田正昭 1984「第4章 宗教と信仰」『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村役場
- 谷口 貢 1987「青ヶ島のシャーマニズム」『駒沢大学文化』10、駒沢大学
- 田村芳朗・金山正好 1960「Ⅶ 信仰 八丈島・小島信仰調査報告」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第3分冊、東京都教育委員会
- 千葉徳爾 1981「6.〔民俗〕末吉地区の民俗（4）集落内の聖地」『八丈島末吉地区文化財調査報告』東京都教育庁社会教育部文化課
- 坪井洋文 1975a「第五章 青ヶ島の社会組織と民俗宗教 二 生業と年中行事」『伊豆諸島一世代・祭祀・村落一』未来社
- 坪井洋文 1975b「第五章 青ヶ島の社会組織と民俗宗教 四 巫女と舎人の伝承」『伊豆諸島一世代・祭祀・村落一』未来社
- 東京都教育委員会編 1960a『伊豆諸島文化財総合調査報告』第3分冊、東京都文化財調査報告8
- 東京都教育委員会編 1960b『伊豆諸島文化財総合調査報告』第4分冊、東京都文化財調査報告9
- 東京都教育庁社会教育部文化課編 1981『八丈島末吉地区文化財調査報告』東京都教育委員会
- 東京都八丈島八丈町教育委員会編 2000『八丈島誌』三訂増補版、東京都八丈島八丈町役場
- 東京都八丈町教育委員会 2001『大里地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』東京都八丈町
- 土岐昌訓 1981a「15 優波夷命神社」式内社調査報告』第8回配本 第十巻 東海道5、皇學館大學出版部
- 土岐昌訓 1981b「22 許志伎命神社」『式内社調査報告』第8回配本 第十巻 東海道5、皇學館大學出版部
- 樋口秀雄校訂 1974『伊豆海島風土記』緑地社
- 樋口秀司編 2010『伊豆諸島を知る事典』東京堂出版
- 廣瀬進吾 1987『三宅島史考』
- 深澤太郎 2009「三嶋神と『三宅記』のアルケオロジーー三宅島の中世積石塚と石神信仰ー」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第1号、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 三橋 健 1978「三嶋大明神縁起」『國學院大學紀要』第16輯、國學院大學
- 三橋 健 2011「第3章 トークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』 IV. 三嶋神・三嶋大明神と伊豆のマツリ」『企画展・トークイベント記録 伊豆半島・諸島における神社の成立と展開ー祭祀考古学研究と校史資料活用の現場からー』『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第3号、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 吉田恵二編 1982『東京都三宅村坪田 中郷遺跡』國學院大學考古学実習報告第4集 國學院大學考古学研究室
- 吉田恵二編 1983～2001『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡』國學院大學文学部考古学実習報告6～35 國學院大學考古学研究室
- 吉田恵二 1984「中世の伊豆諸島遺跡」『文化財の保護』第16号 東京都教育委員会

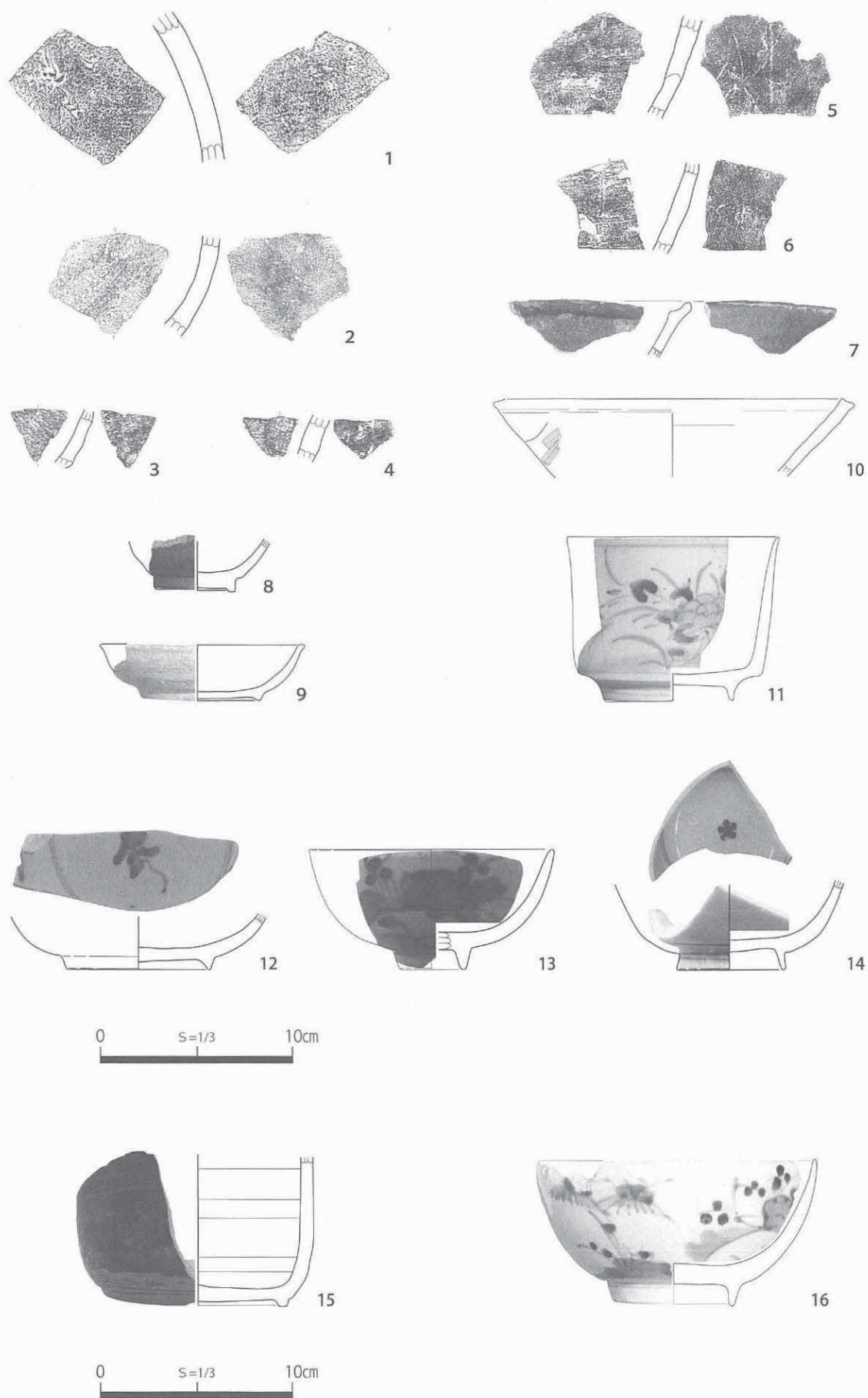


図 12 八丈島・青ヶ島のイシバ表面採集遺物

表1 八丈島・青ヶ島のイシバ表面採集遺物観察表

図版番号	散布地		名称	時期	観察事項
図12-1	八丈町大賀郷	三島神社 (戸隠神社)	常滑甕	中世	常滑甕の胴部下半部。暗褐色を呈する。焼成堅緻。
図12-2	八丈町末吉	八幡様	常滑甕	中世	常滑甕の胴部下半部。灰褐色・暗褐色を呈する。内面には、炭化物が付着する。焼成堅緻。
図12-3	八丈町末吉	八幡様	土師質	中世	土師質土器の胴部。外面には、指頭圧痕と推定される凹凸が観察される。内面には、条痕状の調整が認められる。橙褐色を呈する。焼成良好。
図12-4	八丈町末吉	八幡様	土師質	中世	土師質土器の胴部。内面には、横位のナデによる調整が認められる。橙褐色を呈する。焼成良好。
図12-5	八丈町末吉	八幡様	渥美甕	12c	渥美大甕の胴部下半部。外面には、斜位の細い沈線が認められる。内面には、顕著な調整痕が認められる。暗灰褐色を呈する。焼成堅緻。
図12-6	八丈町末吉	八幡様	渥美甕	12c	渥美大甕の胴部下半部。暗灰褐色・暗褐色を呈する。内面に横位の沈線あり。焼成やや不良。
図12-7	八丈町末吉	八幡様	捏鉢	15c	瀬戸捏鉢の口縁部。全体に鉄サビを施す。暗灰色を呈する。
図12-8	八丈町末吉	八幡様	天目碗	16c	天目碗残欠。底部を除き、全体に鉄釉が施される。焼成堅緻。2次焼成を受けている。大窯Ⅳ期～Ⅴ期に比定される。底径4.4cm。
図12-9	八丈町末吉	八幡様	志野皿	17c初	志野皿残欠。底部内面を除き、全体に長石釉が施釉される。大窯Ⅴ期に比定される。焼成良好。口径11.2cm、器高3.0cm、底径6.5cm。
図12-10	八丈町檜立	弁天様	捏鉢	15c	常滑捏鉢の口縁部。暗赤褐色を呈する。焼成堅緻。推定口径38cm。
図12-11	八丈町三根	浅間神社 (西山火口)	碗	17 c 後半	伊万里染付蓋付向付。染付で草花文を描く。口径11.0cm、底径6.6cm、器高8.6cm。
図12-12	八丈町檜立	三島神社	碗	18 c 前半	伊万里染付くらわんか碗。比較的大振りの碗で、見込に草花を描く。底径7.4cm。
図12-13	八丈町檜立	三島神社	碗	18 c 中頃	伊万里染付くらわんか碗。口径11cm、底径4.0cm、器高5.0cm。
図12-14	八丈町檜立	三島神社	碗	18 c 中頃	伊万里染付くらわんか碗。底径5.4cm。
図12-15	青ヶ島村西郷	金毘羅神社	徳利	17c後半 ～18c前半	美濃徳利の下半部。所謂、尾呂徳利である。底部を除き、全体に鉄釉が施される。底径10.0cm。
図12-16	青ヶ島村西郷	金毘羅神社	碗	18 c 前半 ～中頃	伊万里染付碗。比較的大振りの碗。口径14.4cm、器高7.4cm、底径5.9cm。

表2 八丈島・青ヶ島のイシバ分布地一覧

(1) 八丈島

三根地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
1	浅間神社	八丈町三根西山火口内	33° 8'27.25" N	139° 45'53.12" E	山頂火口部に構築、石祠背後立石	-	3~13
2	浅間神社末社	八丈町三根西山中腹	33° 8'18.12" N	139° 46'11.74" E	自然石のみ	-	14~15
3	浅間神社	八丈町三根(西山麓「富士山道」路)	33° 7'27.61" N	139° 47'22.16" E	丸石集積	-	16~17
4	天照皇大神宮(荒島護神)	八丈町三根	33° 7'16.17" N	139° 48'10.45" E	末社に金毘羅神社(石祠)他	-	18~23
5	牛播磨間安全祈願の碑	八丈町三根(護神交差点)	33° 7'15.95" N	139° 48'7.54" E	-	-	24~25
6	八郎神社(忠次郎祠)	八丈町三根	33° 7'9.59" N	139° 48'38.02" E	-	-	26~29
7	根田原神社	八丈町三根根田原	33° 7'1.83" N	139° 48'32.42" E	神体・井財天	-	30~31
8	尾瀬観音	八丈町三根尾瀬	33° 6'53.40" N	139° 48'16.49" E	-	-	32~33
9	オホ地蔵	八丈町三根矢崎	33° 6'38.10" N	139° 48'1.66" E	-	-	34~35
10	八幡宮	八丈町三根	33° 6'30.00" N	139° 48'9.35" E	-	-	36~39
11	六地蔵	八丈町三根川向	33° 6'48.65" N	139° 47'52.93" E	善光寺一字一石供養塔原位置	-	-

大賀郷地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
12	護神山	八丈町大賀郷(護神山公園内)	33° 6'39.79" N	139° 47'29.52" E	社殿背後に石祠	-	40~45
13	崇福寺近傍のイシバ	八丈町大賀郷	33° 6'42.91" N	139° 47'36.01" E	屋敷神か?	-	46~47
14	横嶺山薬師堂	八丈町大賀郷	33° 6'8.96" N	139° 47'30.95" E	-	-	48~51
15	抱膝長女石塙(丹那婆の)	八丈町大賀郷楊梅ヶ原1(釈迦堂境内)	33° 6'12.48" N	139° 47'33.38" E	-	-	52~55
16	弁天山	八丈町大賀郷大里弁天山(八重根漁港)	33° 6'5.43" N	139° 46'35.09" E	山麓と山頂に構築	-	56~59
17	薩神社(出雲様)	八丈町大賀郷大里	33° 5'58.33" N	139° 46'48.00" E	-	4-1	60~63
18	三島神社(戸隠神社)	八丈町大賀郷大里	33° 5'58.43" N	139° 46'49.09" E	優婆塞宝明神社末社	4-2	64~67
19	稲荷大明神	八丈町大賀郷大里	33° 5'59.50" N	139° 46'52.06" E	石祠背後に自然立石	4-3	68~71
20	松尾神社	八丈町大賀郷大里	33° 5'59.65" N	139° 46'52.67" E	-	4-4	72~75
21	為朝神社	八丈町大賀郷大里	33° 5'41.34" N	139° 46'55.30" E	イシバ背後に巨岩	-	76~79

檜立地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
22	三島神社	八丈町檜立岸之山	33° 4'26.03" N	139° 47'24.14" E	山頂付近に構築、社殿背後に立石	5	80~87
23	大神宮	八丈町檜立尾崎	33° 4'24.93" N	139° 47'44.03" E	山頂部に構築	-	88~95
24	金刀比羅神社・不動堂	八丈町檜立中平	33° 4'13.52" N	139° 47'49.24" E	社殿裏に石有り	-	96~103
25	蓮六神	八丈町檜立釜ヶ郷	33° 4'12.41" N	139° 47'50.18" E	小山に構築、石祠背後に立石	-	104~109
26	庚申塔	八丈町檜立安政里	33° 4'12.07" N	139° 47'50.29" E	-	-	110~111
27	弁天様	八丈町檜立	33° 4'9.73" N	139° 47'54.85" E	小山の盤座周囲に構築	-	112~117
28	都道路傍のイシバ	八丈町檜立	33° 4'10.84" N	139° 48'2.59" E	-	-	118~119
29	八幡山 八幡宮 稲荷神社	八丈町檜立ナラミガ平 八丈町檜立ナラミガ平(八幡山山頂) 八丈町檜立ナラミガ平(八幡山山頂)	33° 4'25.29" N	139° 47'59.90" E	山頂部に構築、背後に自然石イシバ	7 7	121~127 128~133
30	八幡山路傍のイシバ①	八丈町檜立ナラミガ平(八幡山)	33° 4'21.91" N	139° 48'3.58" E	-	-	134~135
31	八幡山路傍のイシバ②	八丈町檜立ナラミガ平(八幡山)	33° 4'27.06" N	139° 48'1.93" E	自然石のみ	-	136~137
32	諏訪神社	八丈町檜立	33° 3'52.11" N	139° 47'46.00" E	-	-	138~141
33	乙千代ヶ浜	八丈町檜立	33° 3'46.97" N	139° 47'46.72" E	イシバ神体の採石地	-	142~143

中之郷地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
34	個人邸内イシバ	八丈町中之郷	-	-	自然石のみ	-	144~145
35	三島神社	八丈町中之郷里道	33° 3'52.06" N	139° 48'23.69" E	社殿背後にイシバ、石祠背後に立石	-	146~157
36	水神様	八丈町中之郷藍ヶ見	33° 3'46.22" N	139° 48'40.60" E	用水路の畔、立石のみ	-	-
37	為朝神社(オオビサマ)	八丈町中之郷大権(裏見ヶ滝)	33° 3'51.83" N	139° 49'0.49" E	石祠背後に自然石イシバ点在	-	158~165
38	大神宮(護神)	八丈町中之郷	33° 3'53.42" N	139° 49'5.38" E	石祠背後に自然石イシバの区画	-	166~169

末吉地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
39	稲荷大明神	八丈町末吉神子尾	33° 4'51.34" N	139° 50'32.67" E	自然立石主体	-	170~173
40	ミナトの神	八丈町末吉洞輪沢	33° 4'34.26" N	139° 50'25.20" E	イシバ背後に巨岩	-	174~177
41	オオタンチョウ(金毘羅様)	八丈町末吉洞輪沢(橋詰)	33° 4'41.21" N	139° 50'45.74" E	イシバ背後に巨岩	-	178~181
42	八幡様	八丈町末吉尾越	33° 4'55.60" N	139° 51'9.47" E	丘陵頂部に構築	-	182~189
43	金山様	八丈町末吉尾越	33° 4'54.89" N	139° 51'10.35" E	丘陵頂部に構築	-	190~193
44	金山様・諏訪様・出雲様	八丈町末吉尾越	33° 4'53.69" N	139° 51'12.44" E	丘陵頂部に構築	-	194~197
45	三島神社	八丈町末吉宮裏	33° 4'59.57" N	139° 51'11.12" E	石祠と自然石のイシバの分別	-	198~203
46	薬師堂	八丈町末吉宮裏	33° 5'3.83" N	139° 51'4.66" E	板石立石	-	204~205

(2) 青ヶ島

休戸郷地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
1	神子の浦	青ヶ島村休戸郷神子浦	32° 28'15.60" N	139° 45'47.62" E	イシバの丸石採取地	-	206~209
2	神子の浦断崖のイシバ	青ヶ島村休戸郷神子浦	32° 28'15.27" N	139° 45'45.48" E	断崖に構築	-	210~211
3	八天狗様	青ヶ島村休戸郷(神子道)	32° 28'11.69" N	139° 45'40.27" E	岩陰に構築	-	212~213
4	清受寺	青ヶ島村休戸郷	32° 27'50.97" N	139° 46'1.58" E	-	-	214~217
5	権ノ坂付近路傍のイシバ	青ヶ島村休戸郷(権ノ坂入口付近)	32° 27'43.50" N	139° 46'10.20" E	護岸壁に構築	-	218~219
6	大里神社・下のイシバ	青ヶ島村休戸郷	32° 27'45.46" N	139° 46'5.20" E	-	10-①④	220~227
7	大里神社・上のイシバ	青ヶ島村休戸郷	32° 27'45.13" N	139° 46'4.32" E	外輪山山頂部に構築	10-①③	228~235

西郷地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
8	金毘羅神社	青ヶ島村西郷長ノ平	32° 28'8.93" N	139° 45'34.39" E	小高い丘陵頂部に構築	11	236~247
9	渡海神社	青ヶ島村西郷	32° 27'52.71" N	139° 45'38.78" E	-	-	248~251
10	東台所神社	青ヶ島村西郷	32° 27'35.17" N	139° 45'41.80" E	外輪山山頂部に構築	-	252~259
11	上手ノ原路傍のイシバ①	青ヶ島村西郷上手ノ原(大凸部西麓)	32° 27'32.34" N	139° 45'28.40" E	護岸壁に構築	-	260~261
12	上手ノ原路傍のイシバ②	青ヶ島村西郷上手ノ原(大凸部西麓)	32° 27'29.34" N	139° 45'27.30" E	護岸壁に構築	-	262~263

池之沢地区

分布図No.	名称	所在地	緯度(世界測地系)	経度(世界測地系)	備考	略測図	図版(通番)
13	シオガマサマ(塩釜様)	青ヶ島村池之沢(三宝港)	32° 26'48.52" N	139° 45'38.67" E	巨岩	-	264~265
14	三宝神社	青ヶ島村池之沢(三宝港)	32° 26'48.22" N	139° 45'40.65" E	-	-	266~269
15	富士山神社	青ヶ島村池之沢(丸山山頂)	32° 27'11.58" N	139° 45'59.55" E	内輪山山頂付近に構築	-	270~271



1. 八丈島 東山（三原山）：檜立地区・中之郷地区



2. 青ヶ島

図版2 八丈島 三根地区



3. 西山 (八丈富士)



4. 浅間神社 (西山火口内) 「巳」の鳥居



5. 浅間神社 (西山火口内) イシバ①の巨岩



6. 浅間神社 (西山火口内) イシバ①: 石垣と立石群



7. 浅間神社 (西山火口内) イシバ①: 石垣と金鳥居群



8. 浅間神社 (西山火口内) イシバ①: 石垣と小祠群



9. 浅間神社 (西山火口内) イシバ②: 遠景



10. 浅間神社 (西山火口内) イシバ②: 願掛け石



11. 浅間神社 (西山火口内) イシバ②: 鳥居周囲の石祠群



12. 浅間神社 (西山火口内) イシバ②: 鳥居奥の石祠・立石



13. 浅間神社 (西山火口内) イシバ②: 鳥居奥立石 (12の左側)



14. 浅間神社 末社 (西山中腹) 遠景



15. 浅間神社 末社 イシバ近景: 立石・金鳥居・小丸石



16. 浅間神社 (西山麓「富士山道」路傍)



17. 浅間神社 イシバ近景: 丸石塚

図版4 八丈島 三根地区



18. 天照皇大神宮（荒島護神） 参道入り口



19. 天照皇大神宮（荒島護神） 社殿



20. 天照皇大神宮（荒島護神） 社殿前庭イシバ：立石群



21. 天照皇大神宮（荒島護神） 社殿前庭イシバ：石祠群



22. 天照皇大神宮（荒島護神） 社殿裏手の金毘羅神社石祠



23. 天照皇大神宮（荒島護神） 社殿裏手の石祠



24. 牛捕仲間安全祈願の碑 遠景



25. 牛捕仲間安全祈願の碑 イシバ近景



26. 八郎神社（忠次郎祠） イシバ：「忠次郎様」



27. 八郎神社（忠次郎祠） 小石祠群



28. 八郎神社（忠次郎祠） 板石室・立石・溶岩



29. 八郎神社（忠次郎祠） 溶岩の石室



30. 根田原神社

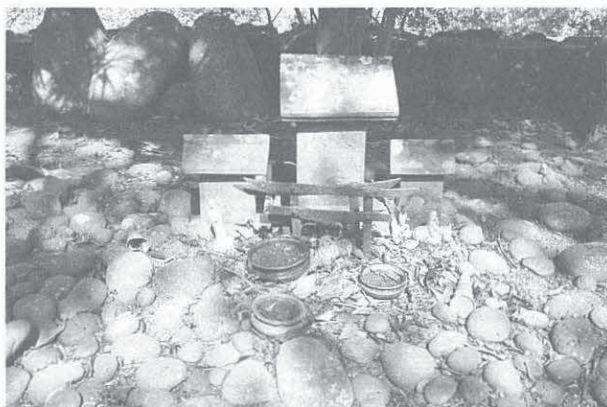


31. 根田原神社 石垣下の小石祠「作守様」

図版6 八丈島 三根地区



32. 尾端観音 境内入口



33. 尾端観音 本堂前庭のイシバ



34. オボ地藏



35. オボ地藏 近景



36. 八幡宮 拝殿



37. 八幡宮 本殿右脇玉石垣上のイシバ



38. 八幡宮 拝殿右脇のイシバ (一部)



39. 八幡宮 拝殿右手玉石垣上の立石群・小石祠



40. 護神山



41. 護神山 山頂玉石垣上のイシバ・社殿



42. 護神山 山頂玉石垣上のイシバ



43. 護神山 左図立石群



44. 護神山 上図石祠群



45. 護神山 社殿背後のイシバ：石祠刻銘「天照皇大神宮」

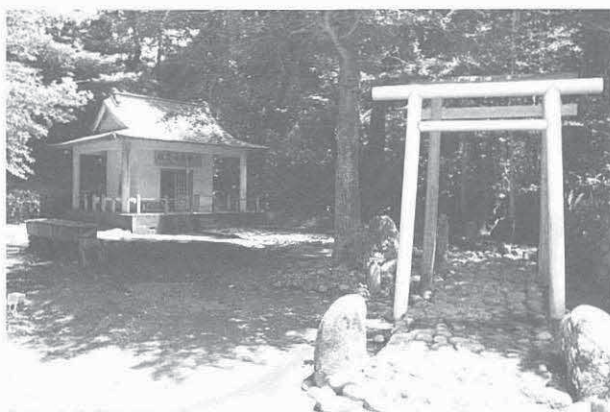


46. 崇福寺近傍のイシバ 全景



47. 崇福寺近傍のイシバ 近景

図版8 八丈島 大賀郷地区



48. 横嶺山薬師堂



49. 横嶺山薬師堂 本堂背後石垣上のイシバ



50. 横嶺山薬師堂 本堂背後石垣上のイシバ (49 左側)



51. 横嶺山薬師堂 左図中央近景



52. 釈迦堂 境内入口



53. 釈迦堂 本堂 (右脇に抱鱈長女石場がある)



54. 釈迦堂境内 抱鱈長女石場



55. 釈迦堂境内 抱鱈長女石場 近景



56. 弁天山 参道入口



57. 弁天山 参道登り口手前のイシバ (一部)



58. 弁天山 山頂イシバ全景



59. 弁天山 境内脇の小石祠



60. 磯神社 (出雲様) 境内入口



61. 磯神社 (出雲様) イシバ全景



62. 磯神社 (出雲様) 中央玉石積状基壇・石祠



63. 磯神社 (出雲様) 石祠裏手の尖石・台石・立石・石室

図版 10 八丈島 大賀郷地区



64. 三島神社（戸隠神社）イシバ全景



65. 三島神社（戸隠神社）中央石壇・石祠・立石



66. 三島神社（戸隠神社）中央石祠・立石近景（背面に立石）



67. 三島神社（戸隠神社）中央石段背後石垣上の石祠群



68. 稲荷大明神 境内入口



69. 稲荷大明神 イシバ全景



70. 稲荷大明神 中央石壇・石祠（背面に立石）



71. 稲荷大明神 中央石段裏手右側の立石



72. 松尾神社 境内入口



73. 松尾神社 東側イシバ



74. 松尾神社 東側イシバ：玉石壇上の石祠・立石群



75. 松尾神社 西側イシバ（一部）



76. 為朝神社 境内入口



77. 為朝神社 入口左手前のイシバ（板石組の祠）



78. 為朝神社 入口左手奥のイシバ（玉石組の石室）



79. 為朝神社 最奥のイシバ全景（巨石・石祠群）

図版 12 八丈島 檜立地区



80. 三島神社 社地遠景（北側から撮影）



81. 三島神社 境内イシバ全景



82. 三島神社 社殿



83. 三島神社 社殿周囲のイシバ



84. 三島神社 社殿西側のイシバ入口



85. 三島神社 社殿西側のイシバ石段



86. 三島神社 社殿北西のイシバ（石祠群）



87. 三島神社 社殿東側面石垣上のイシバ（列石）



88. 大神宮 参道入口



89. 大神宮 山頂社地全景



90. 大神宮 社殿左手前の立石群



91. 大神宮 社殿右手前の立石群



92. 大神宮 社殿と右手奥のイシバ



93. 大神宮 社殿右手奥のイシバ (板石組石室内に小石祠)



94. 大神宮 社殿右手奥のイシバ側面



95. 大神宮 社殿右手前のイシバ (板石組小石室)

図版 14 八丈島 檜立地区



96. 金刀比羅神社・不動堂 境内入口



97. 金刀比羅神社 社殿



98. 金刀比羅神社 社殿左手前のイシバ (立石群)



99. 金刀比羅神社 社殿左脇の玉石垣・板石垣・小石祠群



100. 不動堂 本堂



101. 不動堂 本堂真後ろの小石積



102. 不動堂 改築記念碑裏手のイシバ (立石・丸石群)



103. 不動堂 左図右奥巨樹根元のイシバ (尖・板・丸石積)



104. 道六神 遠景



105. 道六神 入口



106. 道六神 石段正面の立石・石祠



107. 道六神 石祠背後の立石群 (石祠左手から撮影)



108. 道六神 石祠背後の立石群 (裏手から撮影)



109. 道六神 石祠左脇の小石祠群



110. 庚申塔 遠景



111. 庚申塔 近景

図版 16 八丈島 檜立地区



112. 弁天様 遠景



113. 弁天様 参道入口



114. 弁天様 磐座のイシバ



115. 弁天様 磐座麓の小石祠（両基刻銘「金山様」）



116. 弁天様 磐座左手斜面の小石祠群



117. 弁天様 尾根上の溶岩石室



118. 都道路傍のイシバ 遠景



119. 都道路傍のイシバ 近景



120. 八幡山 遠景



121. 八幡宮 参道入口



122. 八幡宮 イシバ全景



123. 八幡宮 中央石壇左手前の立石群



124. 八幡宮 中央石壇右手前の立石群



125. 八幡宮 中央石壇上の石祠



126. 八幡宮 背後の巨樹根元のイシバ (尖石の立石群)



127. 八幡宮 背後の巨樹脇のイシバ (尖石の立石群)

図版 18 八丈島 檜立地区



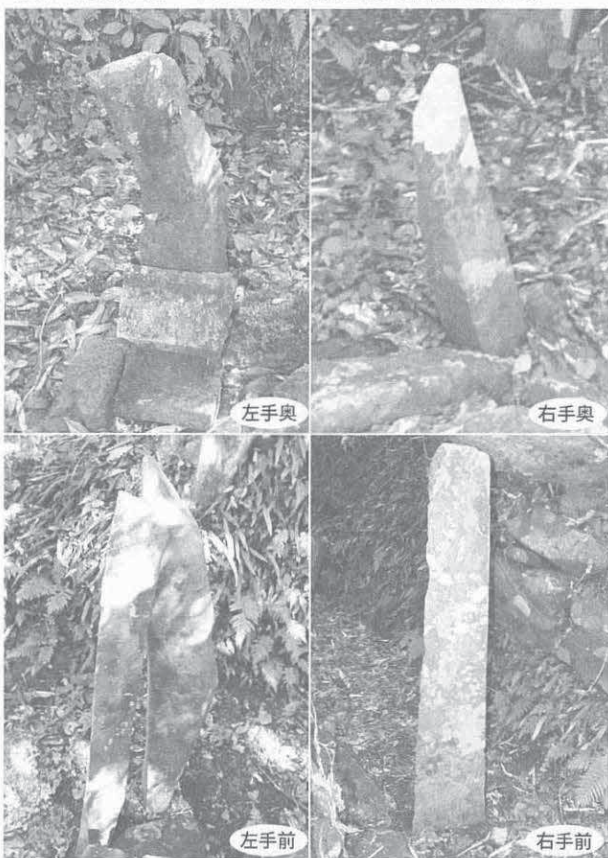
128. 稲荷神社 参道入口



129. 稲荷神社 イシバ全景 (左奥上段の木根が図版 126)



130. 稲荷神社 石壇上中央の石祠



131. 稲荷神社 石壇四隅の立石



132. 稲荷神社 奥壁左手の立石



133. 稲荷神社 奥壁右手の立石群



134. 八幡山路傍のイシバ① 全景



135. 八幡山路傍のイシバ① 近景



136. 八幡山路傍のイシバ② 遠景 (上段・下段)



137. 八幡山路傍のイシバ② 近景 (下段)



138. 諏訪神社 イシバ全景



139. 諏訪神社 石祠正面



140. 諏訪神社 石祠背面



141. 諏訪神社 石祠側面・板状立石の石垣

図版 20 八丈島 檜立・中之郷地区



142. 乙千代ヶ浜（檜立） 板状節理



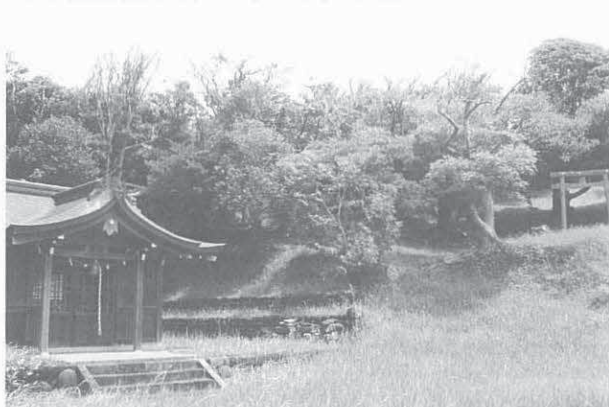
143. 乙千代ヶ浜（檜立） 板状節理



144. 個人邸内イシバ（中之郷） 全景



145. 個人邸内イシバ（中之郷） 近景



146. 三島神社（中之郷） 境内遠景



147. 三島神社（中之郷） ①上段のイシバ 全景



148. 三島神社（中之郷） ①上段のイシバ（中央石祠左・裏手）



149. 三島神社（中之郷） ①上段のイシバ：石祠背後のイシバ



150. 三島神社 ②社殿背後のイシバ (方形区画状)



151. 三島神社 ②社殿背後のイシバ (入口左隅の立石群)



152. 三島神社 ②社殿背後のイシバ (右奥隅の石祠・立石群)



153. 三島神社 ②社殿背後のイシバ (左図右手に隣接)



154. 三島神社 ②社殿背後のイシバ (153 近景)



155. 三島神社 ③最上段のイシバ (全景)



156. 三島神社 ③最上段のイシバ (中央石祠背後の立石)



157. 三島神社 ④最奥部のイシバ

図版 22 八丈島 中之郷地区



158. 為朝神社 参道入口



159. 為朝神社 山頂イシバ全景



160. 為朝神社 石壇上のイシバ (石祠・立石群)



161. 為朝神社 左図中央石祠背後のイシバ



162. 為朝神社 石壇裏手尾根道のイシバ①



163. 為朝神社 石壇裏手尾根道のイシバ②



164. 為朝神社 石壇裏手尾根道のイシバ③



165. 為朝神社 石壇裏手尾根道のイシバ④ 尾根突端



166. 太神宮（護神） 参道入口



167. 太神宮（護神） 山頂イシバ全景



168. 太神宮（護神） 山頂イシバ近景



169. 太神宮（護神） 中央石祠背後のイシバ（正面から撮影）



170. 稲荷大明神（末吉地区） 入口



171. 稲荷大明神（末吉地区） イシバ：石組の石室・小石祠



172. 稲荷大明神（末吉地区） イシバ（左側から撮影）



173. 稲荷大明神（末吉地区） 石室近景

図版 24 八丈島 樫立地区



174. ミナトの神（沖ノ明神） 遠景



175. ミナトの神（沖ノ明神） 岩陰のイシバ



176. ミナトの神（沖ノ明神） 岩陰のイシバ近景（左手から）



177. ミナトの神（沖ノ明神） イシバからの眺望（洞輪沢港）



178. オオタンチョウ 遠景



179. オオタンチョウ 岩陰のイシバ全景



180. オオタンチョウ 岩陰左手のイシバ



181. オオタンチョウ 岩陰右手のイシバ



182. 八幡様 イシバ入口



183. 八幡様 イシバ遠景



184. 八幡様 イシバ近景



185. 八幡様 中央石祠と背後の集石



186. 八幡様 中央石祠左手奥の立石群



187. 八幡様 中央石祠右手奥の立石群



188. 八幡様 イシバ手前の丸石集積・板石の立石



189. 八幡様 左図左側から撮影

図版 26 八丈島 末吉地区



190. 金山様 遠景



191. 金山様 イシバ全景



192. 金山様 奥壁部のイシバ (石祠・立石・丸石)



193. 金山様 左手朱塗りの石祠



194. 金山様・諏訪様・出雲様 参道



195. 金山様・諏訪様・出雲様 イシバ全景



196. 金山様・諏訪様・出雲様 石組室・両脇の立石



197. 金山様・諏訪様・出雲様 石室背後の立石群



198. 三島神社 遠景



199. 三島神社 拝殿 (背後に本殿)



200. 三島神社 拝殿左手前のイシバ



201. 三島神社 拝殿左手前のイシバ (立石群: 左図中央)



202. 三島神社 本殿左脇のイシバ (立石群)



203. 三島神社 本殿右脇のイシバ (石祠・立石群)



204. 薬師堂



205. 薬師堂 背後の板状立石

図版 28 青ヶ島 休戸郷地区



206. 神子の浦



207. 神子の浦 浜の玉石



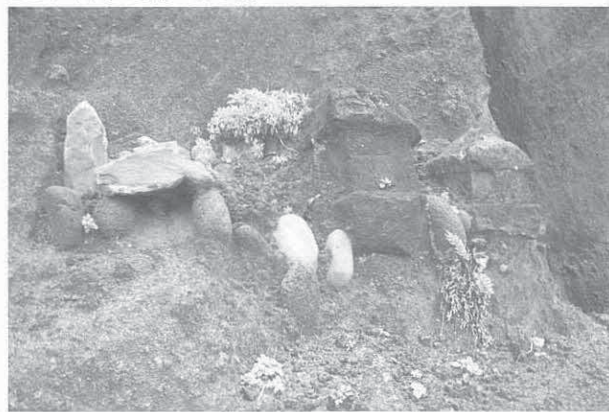
208. 神子の浦 神子様（遠景）



209. 神子の浦 神子様



210. 神子の浦 断崖のイシバ（遠景：位置▼直下）



211. 神子の浦 断崖のイシバ近景



212. 八天狗様



213. 八天狗様 岩陰のイシバ近景



214. 清受寺 本堂



215. 清受寺 石壇上の卒塔婆と立石 (遠景)



216. 清受寺 左側の溶岩立石



217. 清受寺 右側の溶岩立石



218. 槍ノ坂付近路傍のイシバ 遠景



219. 槍ノ坂付近路傍のイシバ 近景



220. 大里神社 参道入口



221. 大里神社 下のイシバ全景



222. 大里神社 下のイシバ 石壇右端部の立石群



223. 大里神社 下のイシバ 鳥居背後石壇上の石祠群



224. 大里神社 下のイシバ 石壇中央部の石祠群



225. 大里神社 下のイシバ 筍様立石「タツミシマジンジャ」



226. 大里神社 下のイシバ(左側から撮影)



227. 大里神社 下のイシバ 前庭隅のイシバ



228. 大里神社 上のイシバ遠景



229. 大里神社 上のイシバ 鳥居・立石・前列石壇



230. 大里神社 上のイシバ 前列石壇左端部近景



231. 大里神社 上のイシバ 前列石壇（左側から撮影）



232. 大里神社 上のイシバ 前列石壇（背面から撮影）



233. 大里神社 上のイシバ 後列石壇（側面から撮影）

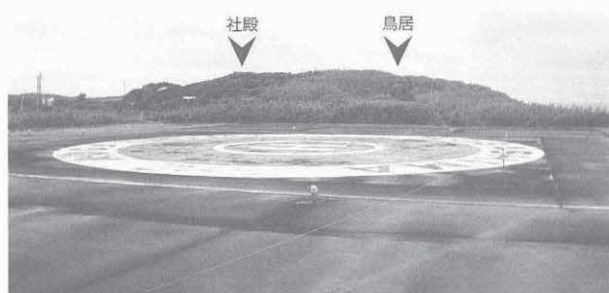


234. 大里神社 上のイシバ 後列石壇近景



235. 大里神社 上のイシバからの眺望（池之沢地区）

図版 32 青ヶ島 西郷地区



236. 金毘羅神社 遠景



237. 金毘羅神社 参道入口



238. 金毘羅神社 社殿



239. 金毘羅神社 社殿右脇石垣上のイシバ



240. 金毘羅神社 イシバ①方形基壇のイシバ



241. 金毘羅神社 イシバ① (西方から撮影)



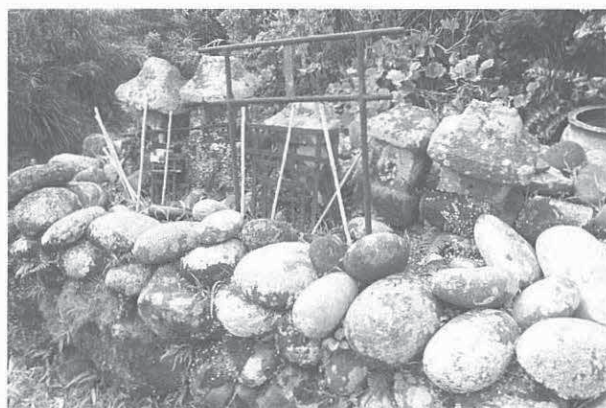
242. 金毘羅神社 イシバ① 立石群



243. 金毘羅神社 イシバ① (東方から撮影)



244. 金毘羅神社 イシバ②からの眺望（裏手より撮影）



245. 金毘羅神社 イシバ② 石壇正面左手の石祠群



246. 金毘羅神社 イシバ② 石壇正面右手の石祠群



247. 金毘羅神社 イシバ②遠景（島北端平ノ耕地から撮影）



248. 渡海神社 上のイシバ



249. 渡海神社 上のイシバ 石壇上の石祠群



250. 渡海神社 下のイシバ



251. 渡海神社 下のイシバ近景（石室・立石）

図版 34 青ヶ島 西郷地区



252. 東台所神社 参道入口



253. 東台所神社 山頂境内入口



254. 東台所神社 社殿



255. 東台所神社 イシバ (社殿左手の石垣上)



256. 東台所神社 イシバ近景 (石祠群)



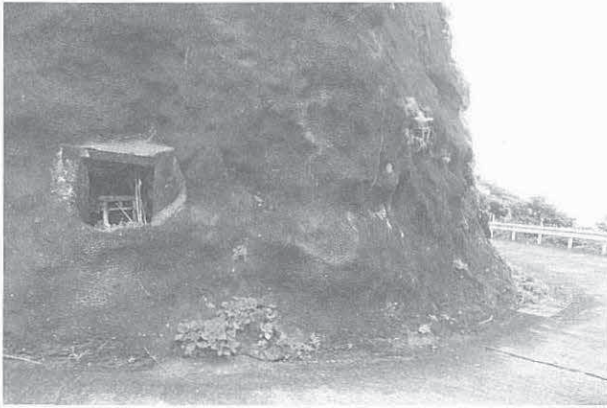
257. 東台所神社 イシバ近景 (石祠群・塩ビ管鳥居)



258. 東台所神社 山頂からの眺望 (島北端まで見通せる)



259. 東台所神社 遠景 (社地東側外輪山尾根部から撮影)



260. 上手ノ原路傍のイシバ① 遠景



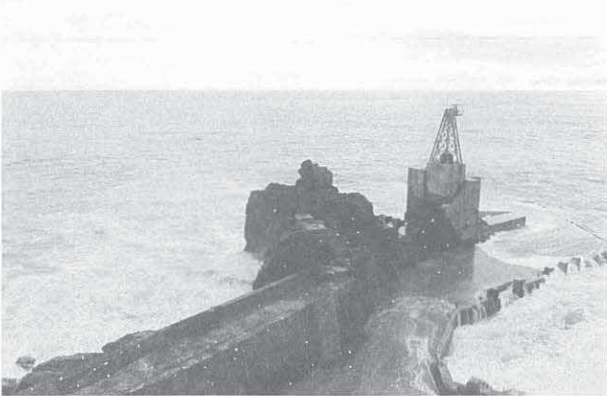
261. 上手ノ原路傍のイシバ① 近景 (小鳥居・尖石)



262. 上手ノ原路傍のイシバ② 全景



263. 上手ノ原路傍のイシバ② 近景 (玉石・小石祠・板石)



264. シオガマサマ (塩釜様：池之沢地区) 遠景



265. シオガマサマ (塩釜様：池之沢地区) 近景

図版 36 青ヶ島 池之沢地区



266. 三宝神社 遠景



267. 三宝神社 全景



268. 三宝神社 イシバ



269. 三宝神社 イシバ立石群



270. 富士山神社 全景



271. 富士山神社 近景